

九州災害時救援・支援ネットワーク構築に関する基礎調査

((一社) 北部九州河川利用協会支援事業)

18. 7 川内川災害現地調査

報告書

事務局：特定非営利活動法人嘉瀬川交流軸

これまでの経緯

平成 18 年 7 月に川内川流域を襲った集中豪雨により大きな被害を受けましたが、当時は災害ボランティアを受け入れる体制が整備されていなかったため、ボランティア希望者からの問い合わせに十分な対応が出来ず、市民団体と行政との連携で何とか乗り切ったと、久留米市で開催された第 25 回筑後川フェスティバルでの NPO 法人交流会議で報告されました。

NPO 法人交流会議のメインテーマとして設定された「河川災害ネットワークの構築」を議論する際の基礎資料を得るために、川内川における災害ボランティアの受け入れ状況と問題点を調査することを目的に、(社) 北部九州河川利用協会の支援を得て「九州災害時救援・支援ネットワーク構築に関する基礎調査」を実施することとしました。

川内川調査を企画していた平成 24 年 7 月に九州北部豪雨が発生し、各地に大きな災害をもたらし、その復旧のために多くの災害ボランティアが支援に駆けつけ、災害を受けた市町では社会福祉協議会が受け皿となって、大きな成果を挙げたことが報道されました。通常は介護等の福祉を日常業務とする社会福祉協議会には、災害時の対応、ボランティア受入のノウハウが蓄積されていなかったため、立ち上げ時には相当の混乱があったとも言われましたが、その正確な実情を把握するために平成 24 年 9 月に、佐賀大学・久留米大学・NPO 法人合同調査団（事務局：NPO 法人嘉瀬川交流軸）を結成し、被災市町の社会福祉協議会の訪問調査を実施しました。（平成 24 年度報告書参照）

今年度の計画

今年度も引き続き（社）九州北部河川利用協会の支援を得て「九州災害時救援・支援ネットワーク構築に関する基礎調査」（事務局：NPO 法人嘉瀬川交流軸）実施することとし、今年度の事業計画として以下の事業を提案し、承認を受けています。

1. 九州河川災害ネットワーク交流会議

筑後川フェスティバルに合わせて毎年開催。九州の各河川で中核的な活動をする NPO 法人等が一堂に会し、交流を深めるとともに、社会福祉協議会の災害ボランティアセンターを支援・補完する体制を協議する

2. 水害被災地復旧調査

活動の中核となっている NPO 法人等が平成 18 年に大水害を受けた川内川現地に集い、当時の状況と復旧に関する調査を行い、今後の方向性を討議する。

3. 災害ボランティアセンターの在り方に関する調査と提言

平成 24 年度に実施した基礎調査報告書を充実させるとともに、持続的ネットワーク構築に向けた提言を行う

平成 25 年度の第 27 回筑後川フェスティバルは、10 月 16 日（水）～17 日に「きよら祭り」と共催で南小国中学校グラウンド、南小国町自然休養村管理センター他を会場に開催されることが決定されましたので、「九州河川災害ネットワーク交流会議」はその時期に実施致しますが、川内川での経験を学び、災害ネットワーク構築に活かす現地調査及び討議を次の要領で実施しました。

平成 18.7 川内川災害現地調査

1. 実施概要

日時： 平成 25 年 6 月 1 日（土）～6 月 2 日（日）

場所： 北薩広域公園（〒895-1811 鹿児島県薩摩郡さつま町虎居 5470 Tel.0996-09-3939）
さつま町、鶴田ダム、大口市等

調査日程

6 月 1 日（初日）

災害状況の説明

12:00 北薩広域公園集合（公園管理事務所前） 参加者確認・事務連絡

12:10 平成 18 年度川内川災害現地説明（川内川河川事務所・さつま町より説明）



虎居激特事業全体説明



虎居激特事業で構築された石垣



川内川表示板



水の楽校標識

意見交換会

場所：北薩広域公園キャンプ場バンガロー

14：00 参加者全員の自己紹介とあいさつ（詳細省略）

14：15 意見交換会

進行：NPO法人嘉瀬川交流軸 理事長 荒牧軍治

テーマ1 平成18年川内川水害

川内川虎居地区激特事業における多自然川づくりの実践



進行：荒牧軍治嘉瀬川交流軸



小林清文ひっ翔べ！奥さつま探検隊

荒牧

それでは私のほうで進行をさせていただきます。ひ

先ほどからの流れから言うと、どうしてもここは激特事業の対象となった水害の話から聞いたほうがよさそうですので、そこから始めます。そしてあとでさつま市さんのほうからボランティアの話を含めてお聞きしたいと思います。それではお願いいたします。

小林

私が下手なしゃべりをするよりも映像を見ていただいた方がわかりやすいと思います。KBSという鹿児島の放送局があるんですけども、激特の災害を受けて取材をしてくれました。それで激特事業をどうにかじ取りをやるかについて、さつま町のNPOが立ち上がったという形で言ってくれました。小牧さんと私が出させてもらったんですけども、その画像を10分ぐらい見たいと思います。水害の状況とかホテルの状況とかを紹介してくれています。天気が良ければ今日はホテルも準備してるんですけども。

～ビデオ視聴～

荒牧

どうもありがとうございました。それでは見学してきたことや復旧事業のこと等について、何かご質問ありませんでしょうか。

国交省の島元さん、昔の私たちの古い感覚だと、激特というのは「元に戻すだけ」という感覚しかないんだけど、こういうふうにまちづくり協議会を設置して、住民と話し合いながら新しい川を作るという考え方はもう普通ですか。

島元国土交通省

激特に限らず、河川改修そのものが我々だけで出来るものではないと思っていますので。

荒牧

激特の場合はえらく厳しかったというイメージがあるわけです。いわゆる「元に復旧する以上のことをやってはいけない」というイメージがあったんだけど、それは今のようになっている？

島元

多分それはないと思います。

荒牧

ないんですね。

島元

災害復旧なんかも昔はコンクリートで原形復旧という話があったけれども、今は多自然型川づくりそのものが、災害後であっても多自然型川づくりをしろという格好になっていますので。

荒牧

そうすると、もちろん地元の人たちとも議論して何かやらないかということは、もう常識になっているわけですか。

島元

はい。それもちょうんとやらなきゃいけないという話になっている。

荒牧

私のほうが古いわけね。「激特＝元に戻すだけ」というのが染みついているものだから。ほかにご質問ありませんか。

小林

当時の状況がこの状況です。深刻な顔を皆さんされていて、当時は「ダム of のせいじゃないか」とか、「国土交通省は何をしてるんだ」とかいうすごい意見がいっぱい出ました。その中で東工大の桑子先生とかの合意形成の専門家の先生や、九州大学の学生に来ていただいたりして、ワークショップの形式で合意形成を図りました。上の写真が当時の鶴田ダムの緊急放流になるときの写真です。もうダムは満杯状態です。上から来る水はそのまま下に、同じ量は出していくという形でやっています。これと同時に、また下のほうで時間雨量の100ミリという雨が降りました。それで虎居地区は水位がどんと上がったというわけですね。

荒牧

そういうのは、ちゃんとデータを出して皆さんに説明すると、理解していただけるんですか。

小林

2. 鹿児島県北部豪雨災害の概要

- ＞2006年7月19日から7月23日にかけて、川内川流域で記録的な大雨
- ＞上流地区では、5日間で1,000mmを越す雨量を数箇所観測
- ＞5日間で川内川流域の年総雨量の約40%、全国平均の約70%の降雨量
- ＞さつま町では、既往最高水位を3.56m超える氾濫⇒甚大な被害発生

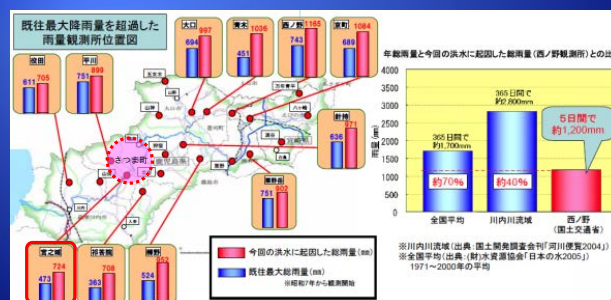


図2-1 既往最大降雨量を超過した雨量観測所(●で表示)

一応、治水的な話として、こういう雨ですよというのは、このグラフを見ていただくと理解できます。全国平均で 5 日間で 1000 ミリを超える雨が降っているんですね。川内川流域では 365 日で約 2800 ミリが平均ですが、5 日間で降った雨が川内川流域の 40% 降っているんですよ。全国平均でいくと平均雨量の 70% が 5 日間で降ったということです。それだけの雨が降ったということです。それだけの雨だったという形で、過去、観測所でもすべてにおいて最高水位を捉えている状況です。

小牧

それは話し合いがありましたけど、最初の 10 回ぐらいは、先ほどありましたが、「国が悪い、どうしてくれるんだ」ここは何回も浸かっていますので、「47 年、いつも後回しだったじゃないか」と。自分の財産がなくなったわけですから、気持ちも分かるんですけど、それはそうとして、これから話し合いをしましょうと言って理解いただいたのは 10 回ぐらい経ってからですね。

もし東北のあとであれば理解が早かったと思うんですけども、いまだったら予算があっちに行って、もうないんです。370 億つかなかったんじゃないかと思って、不幸中の幸いだと思っています。

小林

九大の島谷先生なんかが、今回のこの事例を持って行って東北で話をされたりしていますね。

荒牧

どういう趣旨で？

荒牧

例えば合意形成の取り方とか。

荒牧

みんなで考えて次のステップを作り上げていく？

小牧

それと、小里という鹿児島県の代議士がいて、親父さんが神戸復興大臣をやった人ですが、この前国会で「川内川の治水工事は全国の河川改修のモデルになるんじゃないか」と発言しています。拡幅、掘削、分水路、築堤、この 4 つをうまく組み合わせて出来ているということをおっしゃられました。ですから今度は小里さんも呼んで、それで川内川の所長さんがお見えになりましたので、ほかのものを作ってもらおうとたくらんでおり



ます。もう私の出番が終わりますが、有効活用ということについてこの間イベントをやりました。あいにく私が雨男だったのか、雨でしたが、こういったのを企画しております。

町でイベントをして、そこへ商店街の不景気をここから逆に吸い上げて町に流していこうという、有効活用というのを考えております。

小林

桑子先生は、「今後どうしていくかということが大事だ」とまず話されたんですね。これが桑田先生と島谷先生と竹下課長さん、当時の調査課長です。「九大のほうでこういう模型実験をやります」という説明をしたうえで、グループ分けして、KJ法という方法で、皆さんの意見を聞いて、どういう川づくりをやっていきましょうかという形で議論します。それを川内川の現地のほうでやられました。

これが九州大学で作った200分の1模型です。本当に実物そのままに作ってもらって、この植栽なんかも6500本の植樹を九大生が作っていて、この学生が今、川内市の職員になっています。

これが九大の模型実験の状況で、井上さんとか、町会議員の方とか、町民の方も全部、バスで九大の伊都キャンパスまで行ってもらって、見てもらいました。この状況で水を流して、ここにインクを流すと、分水路に確かに流れ込んでくるのが分かる状況になっています。

また越流堰の機能を模型実験で確かめました。通常の河川を殺さないために、何メートルの水位になったときに越流堰こちらに流せばいいかというのを模型実験で決めて、そういう形でやっています。

7. 景観水理模型実験による検証

7-1. 実験説明会

- 景観及び水理検討を行う模型を九州大学に作成(S=1/200)
- 実験案=工事案:4案程度から絞り込み
- 実験のポイント:治水上の安全性,良好な景観,砂洲の保全



写真7-1 地域住民への実験説明会(実験案のワークショップ)

11

7. 景観水理模型実験による検証

7-2. 景観水理模型

- 砂洲形状の変化を検討する移動床(フルード相似則)
- 水位に影響するため、現地の樹木高さも正確に再現
- 実験後、水理模型を加工し、良好な景観、利用しやすい形状の検討

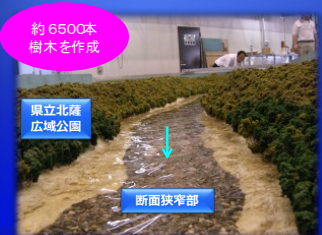


写真7-2 九州大学に作成した景観水理模型(縮尺S=1:200)

12

7. 景観水理模型実験による検証

7-3. 公開実験(ワークショップ)の開催

- 治水上の効果と環境への影響が直感的に理解
- 透明性と信頼を保つため、大学にて公開実験を実施
- 結果の広報・情報発信⇒NHK等の報道機関による取材、放映

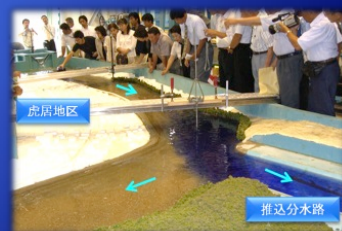


写真7-3 さつま町の地域住民が参加しての公開実験(九州大学にて)

13

これが洪水時の水位です。これが改修後の分水路対策とか下流掘削とか築堤をやっているんですね。ここの河道の一番狭くなっているところがここだったんですね。それとここが狭くなって、大きい流量が流れると水位が後ろにバックでせきあがっていくんです。それとここの虎居城のところ、これがぐるっと回ってる分でせきあがってくる。その分で2m上がって、0.5mあがって、合計 2.5m上がっちゃうところなんです。これが計画堤防高ですので、これから 2.5m越えちゃったということです。

これを切り開くことが、今は県立公園ができていますから、できなかったんですね。それと川内市のほうに下流側に悪さをするという意味合いもありまして、当時の水位を守ったままで上流の市街地の水位をどう下げるかということで、この分水路対策、河道確保をしたり、拡幅をやったりして、虎居町のほう、ピンク色になっているところに浸水ないように堤防を作ったりという形で対策をやっております。それで 2.5m水位を下げることができたという形になっています。

これで検証ができていう形で、地元もこれで合意形成がとれたという形になります。九州大学さんの模型実験はすごく効果がありました。

それと先ほど言いましたが、なぜ石積みをしたかというので、曾木の滝の分水路で石材が大量に発生しましたので、その石を使えという話になりました。これは虎居城の中にある石積みです。品物の品という字を入れた感じです。これは布目崩し積みです。穴太積みとしたかったんですが、穴太積みとは言えないとおっしゃったものですから、布目崩し積みという形で、これを見本にして虎居の護岸を作っています。

ここに先ほど小牧さんが見せてもらったキャラクターがいます。さつま君というキャラクターがいるんですけど、これはあとからできたキャラクターなんですけれども、タケノコが帽子をかぶって、目があって、手をこう……これが 3mぐらいあるんです。これが出るまででは私はNHKのおじゃま丸くんという形で言ってたんですけど、たまたまキャラクターが決まって、そういう偶然も出てきています。

7-4. 水理実験結果

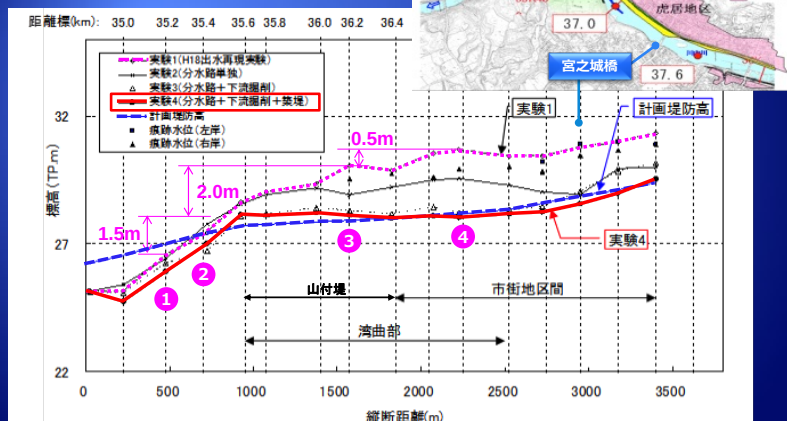


図7-1 水理実験結果

14

8. 実施設計への反映

8-1. 建設発生材の有効活用

虎居地区における石積みの必要性

地域の歴史や文化の継承

「品」の字を基本形とした目地を通さない布目崩し積みを採用

石積みにて河積拡大
構造的には練積み
外観的には空積み



写真8-1 薩摩興業跡の石積み(野面積み)

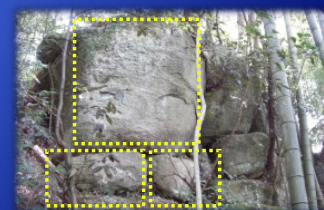


写真8-2 虎居城跡の石積み(布目崩し積み)

15

あとは地域住民に合意形成をさせるために模型を作って、その模型が実際に、あとは夢を語ってもらうために小牧さんにこういう話をしてもらったり、今日来ていただいたシンヤさんとか三浦さん、地元の公民会長さんとかにいろいろ協力をもらいながら、将来こういう川を作るんだというのを、こういうイメージパスとかで地域の方に説明して、写真とかを合わせてこういう形になって、実際にこれがこういうふうに出て上がっていますよという形ですね。

パスをうまく見せて、それで地元の方々に夢物語を言

ってもらいながら、「夢ではなくて実際に作っていくんだよ」という話で、それをまた小牧さんは商工会長でもありますので、商工会とうまく連携しながらですね。これが最後に見ていただいたところで轟の瀬といいます。あとは鳥瞰図だけで空から見ただけでは分からないというのがありまして、アイレベル図という、人から見た目線でどう見えるかというのがこれです。ここの家を全部撤去しているんですね。これがこうなって、ここを拡張したとか、こういう絵を使いながら説明します。

石積みもこういう形で施工屋さんに施工指導をしました。石積みをこういうふうにするんだというのを工事連絡会で説明します。20 工区以上同時発注されましたので、国交省さんと一緒にこういう形でやりました。施工屋さんは、黙って積むとこういうふうに積むんですね。この方が鹿児島島の甲突川の5大石橋群を作られた石工さんです。その方がおられたものですから、こういう積み方をしたいんだけど指導できるかと話をして、指導してもらってからこういう積み方になりました。品物の品という漢字に似たような形で布目崩し積みというやり方をやりました。施工指導を1回やってから現場に入ったという形になっています。

初めは目地をこの辺に作っていたのをこっちに作れとか、今日はお見せできなかったのですが、最初は上流側にコンクリートがべったり付いているんですけど、それを施工指導しながら、角に



図8-1 虎居城周辺からの鳥瞰図

17

9. 施工へのフォローアップ

9-2. 施工要領図の作成



図9-2 石積み護岸の施工要領図 事例

24

石を入れてくれとか、そういう形の補修もフォローアップしながら国交省さんと一緒にやらせてもらいました。

左側が模型で、右側が実際にできているやつです。ほとんど同様の感じで出来上がっています。左側が分水路の模型で、右側ができている写真です。

これが完成の上から見た写真です。皆さん方が降りたところはここです。こういう形になっています。ここが虎居城のところ。これが越流堰のところ。これが越流堰のところ。これが越流堰のところ。

これが竣工して2週間後に洪水でこういうことになっています。これは、歩こう会をやったときの状況です。これは皆さん方が歩いていただいたところです。

今日見れなかったところ、上流側もこういう形になっている状況です。小牧さんが子どもを連れて川流れ大会とかもやっています。一緒に協力してもらったんですけど、Eボートの下りをやったり、九州地区のRACのやつです。上野さんとかも一緒にやってもらったものです。川で遊ばせるための資格も取った上でやっています。

びっくりしたのが、今小牧さんが言ったのは川内川の川まつりですが、女子高生が川の中で泳いでいたんです。これはびっくりしました。新谷さんと三浦さんも「若いもんには負けん」という形で、こんなEボートに乗ってもらいました。こいのぼりは先ほど出ていたこういう形で、あとは水辺の再生計画が出来ております。

これはつい先週ぐらいで、川流れ大会。小牧さんとかNPOの連中がこうして、今は白鳥が来てくれています。

これはこの前の島谷先生の10周年記念で使わせてもらったやつなんですけれども、こんな形で激特事業をやらせてもらいました。以上です。

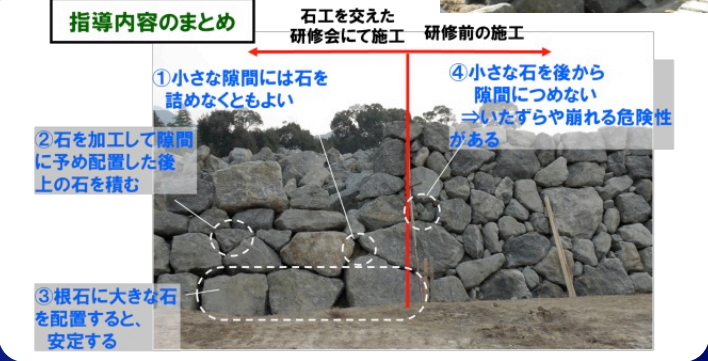
【激特事業に関する討議】

小牧

今説明がありましたけれども、最初、「川内川の河川改修をこのようにするんだ」と見せてもらったんですよ。「まるで夢物語だな。こんなのができるもんか」という気持ちがありました。

9. 施工へのフォローアップ

9-4. プレ施工・勉強会の実施



指導内容のまとめ

- ① 小さな隙間には石を詰めなくともよい
- ② 石を加工して隙間に予め配置した後上の石を積む
- ③ 根石に大きな石を配置すると、安定する
- ④ 小さな石を後から隙間につめない → いたずらに崩れる危険性がある

石工を交えた 研修会にて施工 研修前の施工

写真9-1 研修後(左側)と研修前(右側)の石積み比較

10. 竣工後の状況

10-4. 地域を育む河川活動～減災対策、郷土の再生



と言いますのは、今までの川と全然違うんですね。この前、四国の方が来られました。その方はこの出身なんですけど、「川内川がまるで変わった。まったく昔と変わった。これは今から川に親しめるね」ということでしたので、「それを今からちゃんとせにやいかんのですよ」という話をしたんです。実はさっきからも出ますように、竹下課長さんが言われましたように、1200ミリの雨に対応できる激特事業による護岸ができた、河川改修がなされた。

もしこれでくい止められない場合は備えておかないといかんということで、実はちょっと持ってきてみたんですが、私どもの公民会では、一昨年防災地図を作ったんですよ。もちろん川内川河川事務所と町のほうから大変なご指導、ご協力のもとに作ったんですが、これをもとに平成18年度の水害の被害を風化させないようにしようということでやっています。今年もこれを修正することにしています。

それから何を先に言っていいた分かりますが、せっかく良いのができましたので、今後はこれの利活用、これが大事です。そのためにはまず今年は、出来上がって良かったという復興の喜びを記念するために、ささやかな記念碑を作ることにしました。それから記念誌を作ることにした。それと復興祭をやろうと。そして過去の災害を忘れないようにし、さらに防災意識を高めていこうという活動を続けているところです。

小林

今の地図には、高齢の方がどこに住んでらっしゃいますよとか、誰が誰を救助に行くとか、マイハザードブックみたいな形のやつを部落の中で作られています。「自分のことを載せるな」みたいなこともありますけど、それを了解を取り付けてやっている。そのために、それぞれの電話番号、携帯も含めて、命を守るためのものだから個人情報保護ということは後回しにしようじゃないかということで、これもいくらかそういうことを押さえながらできております。今回出来ている分ではそこまで書いてないですけど、部落会長さんとかはお持ちです。

小牧

私のところは13班あるんですが、班のはきちんと名前を書き込んであります。そうしないといざというときに役立ちませんので。障害を持たれた方とか一人で暮らしている方とか、誰が救助に行くというのまで全部ちゃんとそれで明記できています。

防災は、今おっしゃるようにハード事業だけではうまくいかないんですね。ソフト事業とハードをセットにして、やっています。町内でも一番熱く燃えてらっしゃるのは町民会です。毎年こういった町内一斉の防災訓練をするんですけど、そのときに避難訓練もされて、毎年班ごとの集会もされています。先ほどの個人情報なんかもあるんでしょうけど、そういったのは無しにしようということで認識されて取り組んで、毎年反省会もしながら、来年はこういうところを直していこうということで、非常に前向きな取り組みをされている団体です。一番必要なのは、隣近所の人がまずいざとなったら命が助かるということです。班ごとのを一番重要視しました。

小林

だいたいこの辺、轟原という集落のところ。ここが避難所になっています。水害の時は避難所がここになっていました。逃げて行くと浸かっていたという、そういうのもあったりしてですね。避難所が天井まで水がきて。それから浸水地図とか町の中の避難場所がどこですよというのをハザードマップみたいな形で、町ごと丸ごとハザードマップをさつま町では全部入れてあります。

小牧

それと住民の皆さんがカッカしているときに、20回ぐらいの話をしてきたんですが、その中で一番理解のある住民代表ということで、この2人にいち早く私が目を付けまして、この人たちが

公民会ごとに自分たちの身近な河川はこうしたいということを言われたら、ほかの遅れた公民会も刺激を受けるだろうということで、半分サクラで、目を付ける私のほうも偉いですけど、優等生でございました。

それで川向うのあっちが虎居町、こっちは屋地川原というんですけど、両公民会長さんたちも話し合いをして、対岸と一緒にになって架け替えたこの橋のデザインをして要望されました。欄干にこういうモニュメントを付けてくれとか、そういうところですね。今後、町づくりの参考になると思います。地域の良い方をサクラに引き込めばうまくいくという。

小林

やっぱり自分の地元だったから、その辺が先に動けたのもあったんですね。だから本当にこういう形で、サクラみたいだけお願いしますとか言って、やっぱり反対する人からはすごい意見が出ますから。

荒牧

反対というのは何が反対なんですか。

小牧

昔大変な目にあったと。国が悪いんだと。上流 4 キロほどに宮之城温泉という大きな温泉があるわけですね。それが町中全部流されて、町中かさ上げしまして温泉街になっているんですけど、その時以来、「国が悪い、国が悪い」と。下に川内市という 10 万以上の町がありまして、上に伊佐市、大口市、その上にえびの市、ここの鶴田ダムというのは河川の真ん中ぐらいにあるんです。普通、ダムというのは上流の人がいないところにあるんですけど、ここは上流に 2 市 2〜3 町ありまして、その真ん中にある。上流に雨がたくさん降れば、こっちは晴れていても大水になるんです。ですから理解がしにくいんですね、住民の方々も。それで 1200 ミリ降ったとか言っても、何だかんだと、「昔約束したのに遅かったんだ」とか、そんなことばかりなんですね。

荒牧

だから計画が良いとか悪いとかじゃなくて、国交省が悪かったとか、いろんな文句が出てくる？

小牧

そうなんです。今、東北の状態を見ると、自分の町に住めなくてよその町に避難しなくちゃいけない。ここはあれだけひどくないので同じところに帰って住んでおられるんです。東北 2 市を見れば理解は早かったかもしれませんが、予算がなかったかもしれないので、時期的には良かった。

小林

最初の段階では、ダムの操作が悪くて被害を受けたのではないかと。ダムのせいでまた被害を受けたんじゃないかという思いが強くて、ダムのほうはどういうふう管理したという記録は残っているんですけども、それも改ざんしたのではないとか疑惑の目で見たりしながら、我々は被害者だと。ダムとか国交省の管理が悪くて我々が被害を受けたのではないか、だから補償を求めるんだというような思いが最初がごとく出ました。そうじゃなかったということと言っても、なかなか信じないというところから始まった。

小牧

NPO がその前にできまして、仕掛け人は山本さんですけど、その遺産が今こんな風に残っている。そのときの町長さんが井上さんで、今は県会議員さんですけど、その当時は山本さんの手引きでいろんな方々とお話をする、私も国交省の方と話し合いをすると国の出先みたいに怒られるんじゃないかということで、電気を消して話し合いすることはなかったですけど、最初のうちは町民の皆さんに遠慮しました。

荒牧

責任追及、不満をぶつけられるということは大きかったわけですね。だから 10 回ぐらいはそれが続いていった、まだ計画してどういう川にしようかという議論よりも、どちらかという不満をぶつける、責任を追及する、そちらのほうが多かったということによろしいですね。

もう 1 つだけ。桑子先生の名前を知ってるものだから、ぜひ教えてほしい。桑子先生のアドバイスで、なるほどと思われたことはありますか。合意形成ということのところにああいうふうに専門家が来られて、この現場を見られて、ここの合意形成のポイントになるところは何かありましたか。

小牧

私が覚えているのは、新潟地震と呼ばれる被害が大きかった地震がありましたが、被害の中心地だった山古志村の復興に向けた土壌づくりが得意な方だと聞きました。会場に来られて 150 人位の方に、自分はこういう意見だということをみんな書いてもらいまして、それを分類して、こうやって貼っていきます。そうすると、「俺は昔の恨みがあるんだ」という人の意見がこれぐらいしかないというのは、はっきり目に見えるんですね。皆さん復興に向かって頑張ろうという意見が多いんだと。だんだん文句を言っていた人は小さくなっていく。手を挙げて言う人はほとんど 1 人。まあ私も反省させられるけど。だから夏祭りの反省会なんとかというのはその手法をいただいて、皆さん書いてくださいって言って、後日分類して対策をお知らせしますといたら、会議が早く終わってすぐ懇親会に入るんです。

小林

それと学生を使われるんですね。九大の学生が一緒に来てくれて、学生がプレゼンターで入ってくれて、グループごとに小会議で、そこで意見をどんどん出させるんですね。それで 2 組の代表、2 組の意見とか言って、学生がまとめてプレゼンしてくれるんです。

それが慣れてくると、地元の方でプレゼンターを育てていって、じゃあ新谷さんお願いねとか、こういう形でお願いねとかいう形でしていったりですね。そうすると本当にその場が見えてくる。

皆さんをずっと並ばせて手を挙げさせると、言う人は決まってくるんですね。大勢の前では言えない意見も、K J 法で付箋紙に書かせるとみんな意見を書いてくれるんです。それで実際に集められる皆さん方も不特定多数で、誰って決まってないんです。たまには役場から連絡がいつてなかったり、全然集まらなかったり、それもあったことはあったんですけど、ただどだい集まってくれるようになってですね。

ただ、もう皆さん方がやっぱり自分のところはどうなってくるのかなというのが分かってくると、だんだん離れちゃうんですね。

日高川内川河川事務所

川内川河川事務所の所長の日高です。今説明された小林さんが N P O の理事で、コンサルタントもされてたということもあり、また商工会とも太いパイプがあって、自治会とのつながりもあったことが大きかったと思います。こういう現場を見ると、いつの間にか自然にできたような形に見えたかもしれませんが、これを作り上げるのは国交省だけでは当然できません。さつま町役場だったり県だったりとか、地元の方とか N P O とか、いろんな方の力が集まってやっとできた。

スタートはいろんなトラブルと言いますか、ぶつかりあって山があったんですけど、逆にそれをバネにしてこういう事業ができたという部分で、それをエネルギーに変えていったという部分では、本当に関係者の力が集まってできた事業だなと私は思っています。

プラス、いわゆる被害を受けてダメージを受けたけど、それをバネにしてさらに良いものを作って財産にしようと、見本になるものを作ろうというような高い目標を掲げて、九州大学の島谷

先生とか関係者が一丸となって今の形があるということでは、ある意味みんなが頑張ったおかげでこういう事業ができたのかなと思っております。

細かいことはいろいろありますけど、それはまた夜にでもいろんな方に聞かれたらいいのかなと思います。以上でございます。

会場から質問

今までの激特事業って、だいたい5年を目途にされるじゃないですか。さっきフローチャートがあったかと思うんですけども、その短い時間の中で、最初の合意を形成する作業から、事業の方針が決まって地元説明とかの作業をどのくらいのスパンで、時系列で行なったかというのを教えていただけたら。

小林

左側に日付を書いて、こんな感じですね。7月22、23日に災害が起きて。とにかく地元住民の反対を押し切りながらも、激特事業に乘せないといけないというのですごく焦っちゃったんです。予算が下りなかったら町がダメになるよというのを小牧さんに言って、それで地元の方もいろいろ、新谷さんとかにもお願いして。とにかく役場の方に協力してもらいながら。

そのときに一番苦労して動かれたのが井上町長だったんですね。いろいろと動いて、闇で動いてもらったんじゃないかなと思うんですけど。とにかくそういう形でやりながら、とにかく激特事業ですよ。それでまた河川アドバイザーとして島谷先生に来ていただいたり、桑子先生なんかに協力をお願いしながら、九州大学なんかの学生も来てもらって、そこで進めていったというのがあります。

その辺が専門検討委員会みたいなことになって、まず実験の説明会をやる事になって、この段階で地元はどういうふうに下ろそうかという形で国土交通省さんといろいろ相談しながら進めました。当然、九大さんも入って、それで地元に入っていた形になります。ある程度方向性が決まってから、こういう公開実験をやりますよということで納得してもらって。4パターンを考えているんですけど、こんな実験をやりますよということで地元で了解をもらって、皆さん方も九大まで見に来てくださいね、こういう模型を作りますよと。

そしたら島谷先生が、その模型は一般の一部の人しか見てないものですから、さつま町に持ってきたと言い出したんですね。運搬費を計上したらとんでもないですよ。それでは小さい模型を作りますからと言って、また小さい模型を作って地域住民にはそれを見せたんですけど。

荒牧

だいたいで洪水発生から1年ぐらいで事業説明会が行われるところまで来てますね。公開実験が2007年の9月ですから、そこまで来るのに2年かかってますね。それから2007年から2009年までだから、1年半、地元で議論が起こってますね。

小林

そこはPDCAの繰り返しですね。実施設計は丸々やって4年間ずっとやったんですね。

実際の事業は、それはできた分だけどんどん施工をやっていきますから、その設計が終わった段階で2年後ぐらいに完成しているという形ですね。5年、6年ぐらいかかっていますかね。あそこについては歴史的な遺産というのがあって、文化財調査が結構長かったですね。それで1年、2年遅れたのはありますね。

工法に関する話は、水利模型実験をやるというときにしたんですよ。分水路を掘削したほうがいいのか、それともトンネルを抜こうかという話もあったんです。4案ぐらい九大で出してもらって。それで地元として虎居城を傷つけないで安全性を確保しないといけないから、開削してもらわないといけないという話になっていったんです。

さつま町からの参加者

今までの議論の中で欠落しているのは、47年の水害です。その水害の教訓がこれに生かされています。分水路と築堤、虎居馬場の引堤工事、そういったものが47年の水害のときに基本的に設計されていたんですね。それで分水路も設計ができていたんです。そのときの下限が80mだったんですが、今回は70mになっています。

47年のそういうのが生かされているということと、それからもう1つは47年の水害のときにいくつかの団体が裁判を起こしたりしているんですね。そのことが参考になっているんですよ。というのは、制度的に裁判をしても勝ちっこないわけですよ。国の責任も限度があるわけですから。完全にするために予算をそれだけ付けることはできなかったわけですから。そういうことの学習ができて、一面では強い補償要求の意見がある一方、そういう学習をしかと受け止めて、「それはそれとして進めてください、こっちはこっちで建設のほうをやろうじゃないか」というのが、被災者協議会の方の意見だったんです。大部分の意見です。それがこういう計画ができて、すぐにそういうふうに分かれたんです。

それでこっちのほうを止めようとしても、止めはならなかったわけです。強い意見があつて。それは最後まで意見があつたんですけれども、建設のほうを急ごうというのが大勢を占めていました。47年のそのことを教訓にしてやったということがあります。

足立川内川河川事務所

川内の事務所の足立と申します。

今回見ていただいて、椎込分水路の土砂が約70万 m^3 出ました。その70万 m^3 というのは半端な量じゃないわけですね。それを処理しないといけない。それを地域のさつま町の協力のもとに、地域の財産として、低いところとかに埋戻して、そこを使えるようにした。70万 m^3 はほぼすべて町内で処理ができたのです。

おかげで、本来であれば処理費とか相当かかるんですけれども、今日見ていただいた石積みとかいろんな法面の遊歩道みたいなやつもあるんですけれども、ああいうのを込み込みで額にしたら約22億で、1 m^3 あたりに換算すると約3000円の処理費という形になっています。通常であれば70万 m^3 を処理するとちょっとした運搬をしてどこかに処理費用を出してやると、おそらくこの倍ぐらいかかる。そういう意味では町の理解と町民の方々の協力がないとできない事業なんです。

一番最初に述べたように、激特事業というのは川内川の上流から下流まですべての事業費が375億円だったんですけれども、その予算の中で処理ができたというのは、本当に地域の方々の協力なしにはできないわけです。また今日見ていただいたように石積みがああいう形でできたということも、本来であれば石積みって高いわけです。皆さんも分かりますよね。本来だったらコンクリートブロックで出来ているものが石積みで出来ている。それでなおかつ予算の中でできるというのは、やっぱり地域の方々の協力なしにはできなかったです。

当然我々も、上流から下流まで事業をいっぺんにやりますから、そこから出たものは有効に使いたいということでやりくりをしながらやりました。逆に石を使っていたから上流側の曾木の滝の分水路の出た石を処分する費用がかからなかった、有効利用できたというのも本当に地域の方々のいろんな意見が融合してできたということで、結果的に素晴らしく良いものができたんじゃないかと思っております。

小牧

今分かりました。島谷先生と2月に会ったときに、おかげさまでと言ったら、これはこの地域だから出来たので、これが都会だったら倍のお金がかかると。ということは半分しかできなかった

たんだよと言われた意味が今分かりました。

荒牧

よろしいですか。どうもありがとうございました。



小牧ひっ翔べ！奥さつま探検隊



さつま町社会福祉協議会の方々



井上さつま町前町長



ボランティア参加から国土交通省職員に
宋川内川河川事務所



部屋の外から参加

テーマ2 災害ボランティアに関する討議

荒牧

災害の状況はこれまでの報告と討議で十分に理解できたと思います。今回の私たちがこちらに寄せてもらったもう一つの目的は、そのとき災害ボランティアの受け入れをどうされたかという事をお聞きする事です。あの当時は災害ボランティアが参加してくることを受け入れる素地がまだ社会的になかったと思います。災害が起こって多くの方々が災害ボランティアに入りたいということを言われいろんな苦勞をされたとお聞きしました。

私たちは昨年、九州北部豪雨の被災地で災害ボランティアの受け入れあたられた社会福祉協議会に調査に行きました。はっきり言って、昔と今では隔世の感があるくらい体制が整っています。川内川災害当時は、まだそういうのが整っておらず、NPO法人と町のほうで受け入れに苦勞されたということをお聞きしました。受け入れ体制の混乱もあったと思います。そういうのをちょっと教えてもらおうかなと思います。

今日は、社会福祉協議会からも来られてますけれども、その当時の事情等を、まず教えてもらってよろしいでしょうか。

山下さつま町社会福祉協議会

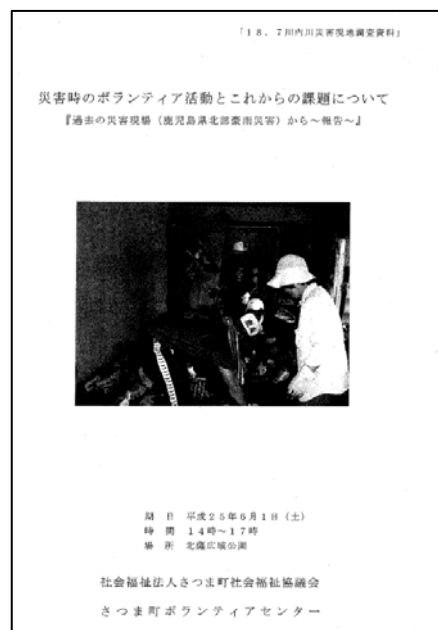
私のほうが準備しました資料はお配りしていると思いますけれども、「災害時のボランティア活動とこれからの課題について」ということです。

改めまして、さつま町社会福祉協議会の山下と申します。よろしくお願ひいたします。「災害時のボランティア活動とこれからの課題について」ということで、18年の川内川災害現場調査資料がございます。その資料に基づいて、我々社会福祉協議会の職員が18年の災害において体験したことを資料にまとめてまいりましたので、説明をさせていただきます。この資料は、災害があったあと県の地域福祉推進大会とか先進地の研修視察に来られた方等にお配りした資料とまったく一緒のものでございます。これは23年に宮崎から研修に来られたときの資料をそのまま使っておりますので、その当時の資料の数字となっております。表紙は鹿児島南高校の生徒さんがボランティア活動に入ったところでございます。開けていただきまして1ページ、さつま町の概要と中身についてはお目通しいただきたいと思います。23年4月1日現在ということで数字を書いております。

2ページです。災害の経過ということで、7月21日、22日、非常に雨がたくさん降りまして、災害対策本部が役場に設置されたり、自衛隊派遣要請があったりということでございました。そして7月23日日曜日、夕方15時、県社会福祉協議会と打ち合わせ。だいたい雨がやんだということで、午後5時に災害ボランティアセンターを設置いたしております。それで5時に避難解除ということでございます。

そして7月24日、鹿児島県共同募金会より災害発生に伴うボランティア活動支援制度があるということでファックスが届きまして、初めて知ったわけでございますが、それで100万円いただくということで申請しまして、災害ボランティアセンターの運営にあたったわけでございます。

それと7月25日には我々さつま町社協の職員だけでは対応できないということで、県の社会



福祉協議会、近隣の社会福祉協議会の職員さんより応援をいただきまして、災害ボランティアセンターの本部は宮之城ひまわり館ということで実施することになりました。

それでスコップ、一輪車が足りないということで、NPO宮崎様よりトラック 2 台分借用をいたしております。そして川原地区というところで、先ほどの轟原地区の向かい側になりますけれども、簡易トイレが必要だということで、2 器設置しております。先ほどから出ています虎居のほうで災害が非常に大きかったということで、虎居現地本部を設置いたしております。

そしてボランティアの送迎に町のマイクロバスを用意いたしまして、宮之城ひまわり館から虎居の現地本部、あるいは柏原、山崎、そういったところにボランティアの方々を送迎しております。

そんな中において健康村温泉さんがボランティアをされた方に無料開放されたり、いろんな暖かい言葉をいただいております。また、夏で暑いですので、社会福祉協議会の看護師を配置いたしました。それでは足りなくて日本赤十字社鹿児島県支部より看護師の派遣要請をいたして救護所を設置したところでございます。

ボランティアがどんどん来て、終わりのほうになってからは運営も順調にいくようになったんですけど、虎居地区の公民館の方々、公民会長さんとか役場の方、いろんな方と協議をして、ボランティアセンターを閉鎖いたしましょうということで 8 月 2 日 5 時に閉鎖が決定しまして、8 月 31 日が災害対策本部、これは役場のほうですけども、閉鎖という形になっています。

その間、毎日朝 8 時と 5 時に現地対策本部の打ち合わせに私たち社会福祉協議会の職員が参加して、ボランティアの状況を連絡しております。それと随時、役場の対策会議に出席いたしております。受入れボランティア数は 2611 人ということでございます。この方々のすべての活動の保険等については、災害支援制度のお金を用意しまして、町外の方々は加入しております。それとポカリスエットとかいろんな経費等もちからから出させていただいたところでございます。

3 ページでございます。共同募金会が行なっています災害支援制度、これは 300 万円が限度だということでございますが、我々さつま町は 100 万円ということで申請しまして、さつま町社会福祉協議会としましては 1 円もお金を使わずに運営が完了できて、本当にありがたかったと考えているところでございます。

4 ページを開けていただきます。5 番目の状況と課題ということでございます。いろんな苦情等もいただいたり、初めてのことで分からなかったわけですが、(2) ですけども、川内川災害の前年度の 17 年 9 月に垂水市で災害が発生しまして、たまたま我々社会福祉協議会の職員も災害ボランティアセンターの運営の手伝いに数名行っておりました。だいたい災害ボランティアセンターはこのような状況だなという知識がある職員が 4~5 人いました。その関係で、県社会福祉協議会の方と一緒にボランティアセンターを 7 月 23 日に立ち上げることができたと思っております。

それと 7 月 24 日は 21 地区の公民館長さんにニーズの把握を行なっています。ニーズの把握を行なってもあまり上がってこなかったのが実情でございました。でも災害弱者の方々だけを対象にという方向もあったんですが、あまりにも被害が大きかったため、被災者全員の方を対象にすべて頑張らしようということで、先ほど申し上げました方々 2611 人の方に来ていただいて、ボランティアニーズが 420 件。特に夏休みということでございますので、中高生 790 人の方が参加していただきました。本当に中学生、高校生は素直に一生懸命頑張ってくれます。市内の高校の野球部とかソフトボール部、いろんな方々が一緒になってきてくれたことは、今でも感動しているところでございます。

平成 9 年に県北西部地震というのがありまして、泊野地区とか鶴田地区、いろんなところで災

害がありました。そのとき私は旧鶴田町の社会福祉協議会の職員でしたが、災害ボランティアとして活動したいという方が来られたんです。ただ、そのときは体制が整っていなかった関係上、帰っていただいたのを覚えております。

トラブルの紹介ということで挙げてございます。ボランティア側からの苦情は、「解体する家屋の清掃をさせられた」「どこまで作業をしていいか分からなかった」とか、「自分は作業をせずに指図ばかりしていた被災者がおられた」とか、非常に憤慨した声も聞かれました。我々はそれを聞く役でございます。

被災者側からは、「到着時刻が遅い」とか「話ばかりして作業しない方がいた」「遊び半分で、旅行で来たのじゃないか」とかいうのも、災害ボランティアセンターに夜 12 時前ぐらいまで電話で苦情がきたところでございました。

一番遠い方は群馬県から来られた方もいらっしゃいました。

5 ページでございます。課題と問題点ということで、ここに別記いたしました。この中で我々が特に思ったのは、町内の方で「ボランティア活動に参加したいのだがどのようにしていいか分からず、声をかけてほしかった」ということです。災害のない地区がたくさんあったのに、行きたいけれども行けなかったということでしたので、大きな災害が起きたらまず地区の代表の方々に寄っていただいて、自分の町で何ができることがあったら交替で災害ボランティアにあたることが一番いいのかなと思ったところです。

災害が発生すると家が空きますので、財布とかいろんな貴重品が盗まれるケースがあるということで、考えました。全国各地から来られますので、そういった面も警察の方々とも協議をしていました。また、田舎のほうですから、親戚筋でボランティアセンターを通らずにお手伝いに行かれた方がたくさんいらっしゃるということは聞いているところでございます。

良かったところとしましては、ポカリスエットとかおしぼりとか、たまたま宮之城ひまわり館という災害ボランティア本部があるのはエアコンが効く大きな施設でございまして、そこで涼むことができたり、ポカリスエットを飲むことができたり、良かったと。ほかのボランティアセンターに行ったときよりも良かったという声をいただいたところでございます。

それと合併後 1 年ということで、職員間がまだ交流が深まっていなかったところ、職員の心が 1 つになったとか、中高生のボランティアの方々には感動させられたところでございました。明後日インターハイに行く高校のあるクラブ活動の子ども達も来てくれたところでございました。

そしてその他ということで列記しましたが、災害ボランティアセンターを通じて、我々だけではなくさつま川内市、出水市、大口市、湧水町、菱刈町、今は伊佐市になっていますが、そういった方々とひまわり館において最後の反省会を行なって、今後の訓練等につなげていけたらと話し合いをしたところでございます。

また、災害応援協定も今年の 11 月に北薩地区、長島町、阿久根、出水、川内を含めて協定を結ぶ方向で進んでいるところでございます。

私のほうからは以上でございます。

1. さつま町の概要（平成17年3月22日合併）

平成23年4月1日現在（ ）内は合併時

	さつま町	宮之城	鶴田	薩摩
面積（k㎡）	303.43	145.95	77.99	79.49
人口（人）	24,338 (27,331)	15,949 (17,770)	4,500 (4,968)	3,889 (4,593)
世帯数	10,817 (10,429)	7,230 (6,813)	1,854 (1,806)	1,733 (1,810)
1世帯当り人員	2.24	2.20	2.64	2.24
高齢化率（%）	34.68	32.82	34.46	42.53

※旧宮之城町役場を本庁とし、それぞれ旧鶴田・薩摩両町役場を総合支所としています。

2. 社会福祉協議会

本 所 … 旧宮之城町社協事務所（宮之城ひまわり館）
事業所 … 旧鶴田町社協事務所（鶴田保健センター内）
旧薩摩町社協事務所（薩摩総合支所別館）

3. 鹿児島県北部豪雨災害（平成18年7月22日）

（1）被害状況

（平成18年9月15日現在）

区 分	内 容
人的被害	死者1人、軽傷者3人
建物の被害	住宅・住宅兼用店舗…全壊流出（219棟、214世帯、437人）、半壊（360棟、344世帯、824人）、一部破損（6棟、6世帯）、床上浸水（115棟、85世帯、222人）、床下浸水（116棟、103世帯） 店 舗…全壊流出（3棟）、半壊（2棟）、一部破損（1棟） 浸水（83棟） 非住家…全壊流出（22棟）、半壊（12棟）、一部破損（53棟）、 浸水（238棟）

(2) 災害の経過

	内容 (○行政、☆社協)
7月21日 金曜日	○18時：災害警戒本部設置
7月22日 土曜日	☆午後職員出勤し協議 ○10時：災害対策本部設置 ○11時：避難勧告 ○11時35分：避難指示 ○11時45分：自衛隊派遣要請
7月23日 日曜日	☆一部避難所の炊出しを行う ☆15時：県社会福祉協議会と協議打合せ ☆17時：災害ボランティアセンター設置 ○17時：避難解除
7月24日 月曜日	☆実質的に災害ボランティア及び災害見舞金等受付開始 ☆県共同募金会より災害発生に伴うボランティア活動等支援制度の活用についてFAXが届く
7月25日 火曜日	☆県社協、近隣社協より応援を頂く
7月26日 水曜日	☆NPO みやざきよりスコップ等資機材を借用 (トラック2台) ☆川原地区にボランティア用簡易トイレ2基設置 ☆災害ボランティアセンター虎居現地本部を設置 ☆ボランティアの送迎バス運行開始
7月28日 金曜日	☆健康村 (温泉) さんがボランティア活動をされた方に無料開放 ☆虎居現地本部に社協の看護師を配置
7月29日 土曜日	☆日赤鹿児島県支部看護師班の派遣要請を行い、救護所を設置
8月1日 火曜日	☆災害ボランティアセンター閉鎖決定に伴う合同会議
8月2日 水曜日	☆17時：災害ボランティアセンター閉鎖
8月31日 水曜日	○災害対策本部閉鎖
その他	☆毎日2回 (8時と17時) の現地対策本部打合せ会に出席 ☆随時役場の災害対策会議に出席 (3回) ☆受入ボランティア数2,611人

4. 鹿児島県共同募金会災害支援制度を利用

- (1) 災害の発生に伴うボランティア活動や活動拠点事務所の立ち上げ、あるいは損壊した福祉施設の建物・設備の復旧等を支援するため、「災害支援制度運営要綱」に基づき、被災県共同募金会における準備金及び他県共同募金会から拠出された準備金を適切かつ有効に活用しました。

今回の鹿児島県北部豪雨災害では、以下について申請を行った。

① 名 称

活動拠点事務所設置（さつま町災害ボランティアセンター）

② 申請者

社会福祉法人さつま町社会福祉協議会長

③ 設置の必要性

梅雨前線による豪雨災害でボランティア派遣を必要とする世帯が多数あり、正確なニーズ把握と的確なコーディネートを行う必要があるため。

④ 設置期間

平成18年7月23日～平成18年8月2日

⑤ 設置場所

宮之城ひまわり館（薩摩郡さつま町宮之城屋地2117-1）

⑥ 活動の内容

- ・被災世帯のボランティアニーズ調査及び受付
- ・被災世帯へのボランティア派遣に係る活動
 - ボランティアの受付業務
 - ボランティア保険加入手続き業務
 - ボランティアニーズとのコーディネート業務
 - ボランティア活動報告のとりまとめ
- ・ボランティア活動に必要な資材の調達
- ・その他

⑦ 経 費（活動拠点事務所の設置に伴う）

- ・事務所立ち上げのための経費
 - 電話の設置、簡易トイレ設置他
- ・事務所借り上げのための経費
 - 今回は必要なし
- ・事務所の維持・管理費、経常経費
 - ボランティア保険負担、事務用品他
- ・事務所の整備・設備費
 - スコップや一輪車等器具什器等の購入

◎今回は、合計1,000,000円を申請し、災害ボランティアセンターの円滑な運営ができました。とてもありがたい制度です。

5. 状況及び課題等

(1) 7月23日(日)に山崎区公民館、二渡区公民館へ職員が出向き炊き出しを行う。

(2) 災害ボランティアセンターの状況結果報告

- ・平成17年9月垂水市での災害ボランティア体験
- ・7月23日(日)午後3時から宮之城ひまわり館にて、県社協ボランティアセンター職員と打合せ及び現場視察
- ・7月23日(日)午後5時に開設。(実質7月24日～8月2日の10日間)
- ・ニーズ把握(7月24日全公民館長へ依頼)
- ・一人暮らし世帯や障害者世帯に限定していく予定であったが、線を引くことが困難になった。(あまりにも被害が大きかったため被災者全員を対象に切り替える)
- ・ボランティア参加者数 2,611人(内、中高校生790人)
町外参加者1,635人
町内参加者976人(直接現地に入ったため少ない)
- ・完了ニーズ数 420件

(3) ボランティアの需要と供給のバランス

- ・センターの解散目前になると気の毒ではあったが、ボランティアさんに帰ってもらった。

(4) 鹿児島県北西部地震との違い

- ・災害ボランティアセンターは立ち上がらなかった。しかし、旧鶴田町では2～3名のボランティア希望者がこられました。災害ボランティアセンターも開設しておらず活動はしてもらわなかった。ブルーシート張り等は、役場職員や消防団員の方々で行った。
- ・今回の災害では、いち早く災害ボランティアセンターを開設した。

(5) トラブルの紹介

(ボランティア側からの苦情)

解体をする家屋の清掃をさせられた
どこまでの作業をしていいか分からなかった
自分は作業せずに、指図ばかりしていた被災者がおられた

(被災者側からの苦情)

到着時刻が遅い
話ばかりして、作業をしない方がいた
遊び半分でこられた方がいた

(6) 課題と問題点

- ・災害ボランティアセンターに対する理解不足（初めての出来事）、被災者がボランティアに教えてもらった例もあった。
- ・作業内容がどこまでできるか。被災者がボランティアに来てもらっていいのかという遠慮の気持ちとボランティアに頼めば何でもしてくれるという気持ちのギャップ。
- ・町内の方でボランティア活動に参加したいのだが、どのようにしていいかわからず、声をかけてほしかった。
- ・ボランティアに対する健康面、衛生面の尚一層の充実。
- ・正しい情報の伝達が重要である。

(7) 良かったところ

- ・他の市町の災害ボランティアに参加された方より、おしぼりやポカリスエット等を準備していただいて、他よりも気持ちよく活動ができた。
- ・夏休みであったため学生さんの参加が多く、中高校生ボランティアの頑張りに感動をさせられました。
- ・職員の心が一つになった。
- ・災害ボランティアセンターの閉鎖に当たって、役場、被災地区公民会長さん等と協議を行った。

(8) その他

- ・役場、関係機関との連携（かねてからの連携）
- ・ボランティアは自己完結型でなくてはならない。（スコップ、軍手、弁当、水筒等の準備）
- ・今回は主に活動資材をNPOみやざきにトラック1台分借用した。
- ・被災者の気持ちを考える。
- ・複数で活動するのが基本。
- ・労働力だけでなく義援金等の支援もボランティア活動である。
- ・県社協、薩摩川内市、出水市、大口市、湧水町、菱刈町の社協職員が合同で、ひまわり館にて災害ボランティアセンターの反省会を行った。
- ・災害ボランティアセンター訓練（平成19年6月18日実施）
- ・安心、安全、福祉の町づくりを目指して活動していく。
- ・子ども、障害者、高齢者にやさしいバリアフリーの町は、全町民にもやさしい町になる。

【休憩】

荒牧

再開させていただきます。今さつま町の社会福祉協議会さんからお話を聞きましたけど、何かご質問ありませんか。良ければ今度はNPOさんの受入れ、学生さんたちの話があったと聞きましたけど、そこら辺はいかがですか。先ほどちょっと紹介がありましたけど。

上野

皆さん、こんにちは。川内川流域連携ネットワークの事務局をやらせていただいております上野と申します。18年の災害のときは、本当に九州の川仲間の皆様にお越しいただき、ご支援いただいて本当にありがとうございました。

ここにお集まりの皆様はご存知かと思うんですけども、7月22日、23日に災害が発生しまして、私も川内川、私は下流のさつま川内市に住んでいるんですけども、川の状況を見ながら災害が発生しているようだということで、22日、23日で川内川流域の川仲間の皆様にはお電話いたしまして安否を確認しました。

九州の河川活動に対しましてはここにお集まりの皆様と長年、これは九州地方整備局さんも含めて、ご支援ご指導の下に集まって、いろいろと話し合い、協力をしたりして活動をやっております。川内川災害は平成18年でしたけど、その前は大淀川が災害にあったり、その前もいろいろ河川で災害がありましたので、何か私たち河川活動団体でも支援、お手伝いできることがないだろうかということの話し合いを行っていました。平成17年の大淀川の災害のときには何かお手伝いすることはありませんかと打診したんですけども、受け入れて何かやれるというところは今のところないのでということがありました。そういう反省もあって18年の川内川の災害のときは上流から下流まで流域全体で災害が発生しているので、もしよろしければご支援にいらっしゃいませんかということの情報発信をメールでありったけの方々にお送りしました。

最初にお返事をいただいたのが九州大学の島谷先生で、その次には一緒に活動されています南畑ダム貯水する会の山下さんですね。今は九大にいらっしゃいますけど。今回の活動の支援者でもいらっしゃいます山本さんからもお電話で「行くからという」とお話をいただきまして、「じゃあ何をしたらいいですか」ということをお聞きしましたら、「交通事情はどうなんだ。どこに泊れるんだ」とか、そういうお話がありました。どこに入りたいかというお話もあって、当然それは一番被害の大きかったさつま町、その次が上流の伊佐、菱刈、そして湧水、そういうところだろうという話になりました。さつま町には山内さんがおられ、地元の当時の町長でいらっしゃった井上さんとか小牧さん、小林さんとか、今日は来られてませんが、湯田温泉のところに日高さんという方が川の活動をしていますけど、そういう方が中心となってさつま町の受入れをやられました。菱刈では今ここにいらっしゃいます流域連携ネットワークの代表の中村周二さんが宿泊受入れをやってくださって、全体で延べ137名の方々に、これは県外の方々の延べ人数が137名で、7月31日までの延べ人数ですが、そういった方々にご支援いただきました。そのほかには鹿児島大学農学部の学生とかもさつま町に入ってもらって、支援していただいております。

状況としてはそういう状況でございます。受け入れるにあたっての状況のところは、当然先ほどさつま町の社協の方がお話をされましたけど、ボランティアセンターを社協さんが開設されましたので、上流のえびのから下流のさつま川内市までボランティアセンターにはすべて電話いたしまして、開設状況ならびにどれくらい受け入れられるのか、または県外は受け入れられるのかとか、そういうところまで調べた上で島谷さん山本さんにはご連絡いたしました。18年の受入れ

状況はそういうところでございます。

山下

社協は日帰りが原則で宿泊型は受け入れていませんが、自分で見つけれられたか、旅館を紹介した例はありました。

小牧

ちょうど旅館を開めたところがあって、そこをNPOの仲間が持っていたのを知ってたから、「空いてるなら貸してくれ」とお願いしました。まだ埃もあまり立ってなかったので、貸し布団を借りて、近くの食堂に食券を発行してもらって、それを我々が払うという形で。九大の島谷先生のところと駄田井先生の久留米大学と、それから福岡大学の土木科の方たちでしたが、何回か分けて来られました。

山下

基本的にはボランティア支援は自己完結で参加しなくちゃいけません。ただ、九州の河川団体の場合はある程度つながり、力もありますので、そこは何とか受け入れる方法で、またいらっしゃるほうもそれぞれ準備をして、来ていただけるようになったと。

荒牧

実際に活動されるときは、社協さんと連絡をとってやるというスタイルですね。だからその指揮下に入るというか、その運営に従ってやるということですね。そしたら社協さんがボランティアセンターを閉じたら、そこはもう無しになる？

山下

8月2日に閉じられたとなっていますけど、だいたい7月31日には終了しました。そのときに行った作業の内容は、ほとんど泥出しに限られます

小牧

私は焼酎屋、あそこがどっぷり浸かりましたので、ビン洗いに行って、あれがだいぶ流れて入口が汚れているから飲んだら危ないということで。今だったらどんどん毎晩飲めたと思うんですけど、それは残念でした。

山本北部九州河川利用協会

私が久留米で募集したときに、女性の方とか一般の方、それから久留米大の医学部の方、それでバス1台で参加しました。上野さんがおっしゃったように宿を確保してもらっていたので、すごい快適なんですよ。快適なボランティア。だからこちらに受入れがあったので、すごく快適でした。大変だろうと思ってタオルやら手袋やら軍手やら汚れていいようなものをたくさん持っていたんですけど。現地では、小牧さんから、ここに行ってくださいとちゃんと指示がありました。ただ、やはり女の人とかはゴミ出しとかとても大変だったようです。途中で学生が1人けがをしたんですね。そのときに小牧さんのほうからすぐお医者さんへ連れて行ってもらったんです。消毒してもらって、1針ぐらい縫ったかな。学生は保険証も持って来てなかったんですけど、先生からは「ちゃんと帰ってから病院に行くように」ということで、お金も払わずに。こっちのほうもすごくよくしてもらったので、帰りのバスの中でも「すごく勉強になりました」ということで感激していました。学生は大変いい経験をしたようです。

小牧

久留米大学でもこういう話がありましたが、その後、学生さんがそういう方々がお見えになって、また話し合いをしたときに、トラウマ的なアフタケアが大事、あるいはその場所において専門家の方がおられたらほぐしてあげるといえるという事になりました。今でも、あのときうちのお袋はショックを受けてガクンと老けたとか、自分が継いできた財産が流れてどうするんだろう

と途方に暮れた、それから町を離れて子どものところへ行っただという人もいっぱいいたんですけど、そういうあとの心のフォローも大事だと感じています。ですから女性の方でも、専門家の方でも、来られたら分担して戴くそれぞれのボランティアがまたあります。学生でネットワークを作って、そういうのをしましょうという話も出たと思います。

この町は昔から川の町ですから、泳ぎが得意で 70、80 になっても皆さん変わりません。若いときのことが頭から抜けなくて、俺は泳げるんだという自信があったのか、夜だったら水に浸かりながら渡ったら足を滑らせて見えなくなつて溺れると思ったかもしれませんが、昼間の水害だったので恐怖感というのはあまりなかったんじゃないかと思います。いざというときは俺は泳げるんだと。でも泳いだら濁流にはかなわないくせに、そういう町だったというのもパニックがなかったんじゃないかと思いますね。

山下

ボランティアを受け入れる側のメリットとか、行く側のメリットとかいろいろあるんですけど、18 年は大学生の皆さんが来られて、特に今、川内川河川事務所の調査課長をやってらっしゃいます宗課長とか、当時、ここに支援をしにいらっしゃった学生さんだったんですよ。

荒牧

あなた、そんなとこに立ってないで、報告でもしなさいよ。あなたも感想を述べなさい。問題点を整理して。

山下

ほかにも九大で……君とかいたんですけど、今は土木系に行ったり、兵庫県庁の土木職員になっていて、その後確か兵庫県でスミヨウチョウでしたか土砂災害があつたりしましたが、そういったものの対策にあたる仕事をやって、活躍しているんですよ。

大学生、特に土木系の大学生がそういう災害ボランティア支援に行くというのは、彼らにとっても非常に良い経験になっていたようですね。それはその後のキャリア育成というところでも非常に有益だったんだなと。そういうふうに私は受けとっています。

また、そのときにボランティアに来た学生には島谷さんが感想を書いてもらっていたんです。それをもらいましたが、九大の学生でも成績優秀だと思うんですけど、自分達は無力だと思ったと。自分たちよりも地元の皆さんに、自分たちは何も大したお手伝いはできないけれども、地元の皆さんに暖かい声をかけてもらったり、一番困ってらっしゃる皆さんに元気をもらったとか、そういうことがたくさん書かれてました。そういうことで学生さんにとっては非常にインパクトの強い、とても貴重な経験だったという状況でした。

荒牧

一番いいヒントをもらっているんだから、今日のレポートのテーマが決まりそうなんだから、お願いします。

宗川内川河川事務所調査課長

お話にありましたように、ちょうど 18 年水害のときに私は九州大学の学生、修士 2 年生でございました。先生から声かけがありまして、こういったことになっているからというのでボランティアに参加させていただきました。当時、確か 1 泊 2 日で私自身は参加させていただいた記憶をしています。

今、いろいろと受け入れ側の話を聞かせていただいて、そういった苦労があつたということは正直言って学生側としてはあまり知らなかったもので、私自身がいろいろご迷惑をおかけしてなければいいなと思いながら、お話を聞かせていただきました。

ボランティアを実際にやって、今、上野さんからもお話がありましたが、一番大きかったの

は家の中に実際に入って行って仕事をするという部分です。今は国の職員として管理者としてやっている立場なんですけど、そういった仕事って個人で頑張ってるしかない、人間の力でやるしかない部分が非常に大きいわけなんですけど、国としてやる部分と個人として頑張らなきゃいけない部分というのがそれぞれあるんだなと思いました。

当時、仕事とかは細かく割り振っていただいて、確か 5～6 人を 1 班にして、それをあなた達はこの地区というふうに割り振っていただいて、この方はこういったことをしてほしいということまで具体的に事前に聞いていたので、それに従って。あとは実際にお宅の方とお話をしながら、こういったこともやってほしいというのを聞きながら、仕事をさせていただきました。そういった事前にご準備いただいたお陰かなと思いますけれども、スムーズにできたかなと思っています。

地元の方から先ほど元気をいただいたという感想があったということなんですけど、私自身もそれは非常に思いまして、ちょうど梅雨がその直後に明けて、非常に天気良かったんですね。35 度を超えるような、非常に暑い中で作業をしたんですけれども、そういった中で飲み物の差し入れをお宅の方からしていただいたりして、そういったときに非常に申し訳ないという気持ちと、逆に元気をいただいたと感じたのを覚えています。

つたない感想ではございますが、一言述べさせていただきました。

轟原公民館

お礼を申し上げなければならないかなと。実は轟原公民館に九大の学生が手伝いにくるんだと聞いて、なんで九大の学生が、何のことだろうと。そしたら上野さんが説明をされまして、こうして裏で支えてくださったんだと、ひょっとしたら宗課長さんが轟原に来てくださったんじゃないかとお礼を申し上げなければならないと、本当にありがとうございました。

実は私のところは 3 回、手分けをしてボランティアを地域の者だけで 3 回、炊き出しやら何やらをしました。先ほど山下局長さんから話も出ましたように、身内の者も来るわけですから、轟原のところで 3 回しましたら、3 回だけで済めばいいんですけれども、ここはしょっちゅう被害を受けましたので、身内の人はその度に行かなきゃいけない。もうクタクタなんですね。そういうときに誰かが手伝いに来てくださったと。本当に涙が出るぐらい嬉しかった。こういう組織を今後も裏でしてくださるということが、いざというときに皆が支えあう社会づくり、その通りだったと思います。ありがとうございました。

井上前さつま町長

今日も聞いてて本当に皆さんの多くのご協力の中でこうして立派な復興になり、本当に良かったな、ありがたいなという気持ちでいっぱいでございます。

私は、合併前は鶴田の町長を 10 年やっていたものですから、鶴田というのはダムと水力発電の町で、特にそういう関係で国交省だったり電源開発とは、非常に親しく協力関係でいろいろとやっていた経緯がありました。それで合併して 2 年目にこういう大きな災害がありましたので、そのときのいろんな過去のつながりがこういう事態になったときに、私も流域で一番大きな被害を受けたということでとにかく先頭に立って復旧復興に向かって国の予算をここに導入しないといけないということで、いろんな方と一緒に声を大にして取り組んだ、働きかけたということでした。

また、ダムの再開発という問題も真最中なんですけど、これも途中でなかなか話が進まなくなっている。当時の治水課長さんが電源開発等の話が進まなくなってもストップしているという話もありまして、私はちょうど東京に上がったときに本社に上がって行って、地元の町長として非常に強く、協力してもらわないと困ると、今までは協力関係で来たけれどもこういうときに地元を助け

てもらわないといかんということで強くお願いして、そこから穴が開いたといいますか、前に進むようになったとあとから聞いて、良かったなと思っていました。

私は私で必死でそのときは走り回って努力しましたがけれども、今日こういう機会を通して、改めていろんな方々の応援と連携の中で素晴らしい復興事業がこのように完成してきたんだなと感じています。この間は曾木の滝にも県の議会の調査があって行きましたが、曾木の滝も本当に素晴らしく再生されて、グレードが非常に上がっているということで、良かったなと思っております。

それと今回また曾木の滝からダムまでの鶴田大口線というのがありますけれども、これが長年の懸案で、なかなか車で通りにくい道路ということでずっと要望してきておったんですけれども、この機会に再開発が終わる 27 年度までに国のほうで、県も一緒になってですけど、10 億の予算でもっと観光的にも良い場所にするということを知事のほうも目に見えるようにやれと言っていたので、その流れも良くなってきます。ここは北薩県立公園ですけど、ここがテーマゾーンと歴史ゾーンというのが残っておりますけれども、これに対しても県のほうが最後までしっかりとやるんだという動きになっていきますので、ここら全体がつながってくると、わが地域は本当に良い町になるんじゃないか、魅力的な町になるんじゃないかと。そして町の真ん中を川が流れている地域として、川を活用しながら地元としても、また来られた方々にも喜んでもらえるような特徴のある町になるんじゃないかと思って、大変喜びながら期待もしているところでございます。本当にありがたいなと、素晴らしい仲間を支えていただいたなと感謝しながら聞いておりました。

小牧

私は合併して、町が合併した 2 年目に商工会長になりまして、参議院議員の特別調査団というのが町に参りまして、商工会長が市街地の被災状況を説明しろということで、バスに乗って回ったんですけど、あとで調査室から電話が来まして、国とか県とか町の公の意見は聞いたけど一般住民の意見を聞きたいから、2〜3 時間聞かせてくれと言われました。ちょうど都市対抗野球が始まって、前にいた会社がたまたま出たので応援に行くのが夜でしたので、その日だったら 2 時間でも 3 時間でもありますからって、初めて霞ヶ関に行きました。

そしたら国も捨てたもんじゃなくて、私どもが言うのは、さっきのビデオを全部持って行って、5 合瓶の焼酎を 3 つメーカーがあるから 3 本だけ持っていった。それが裏金といたら裏金でしょうけど、いっぱい聞いてくれました。国もそこまで考えているのかと、お役人というのは決まった仕事しかしていない人だと、こういう良い人もいるんだけど、ほとんど霞ヶ関というのはそうだろうと思ってましたので、NPO の経験とか民間の意見を言ったら、特別委員会のあとすぐに議事録を持って来て、お宅が言ったようなことをうまく鍛冶屋という議員が質問してくれて、国のほうも回答を書くのは調査委員会ですから、それをうまく織り込んでいただいたというのはあとで聞いたんですけど、民間のいろんな現場の活動というのも裏づけとしてよかったんじゃないかなと。

荒牧

やっぱり市民が一緒に参加しているということについて、向こうが評価してくるという。NPO も捨てたもんじゃないと。ありがとうございました。ほかに何かありますか。

先ほど社協の方に 1 つだけ質問させてもらっていいですか。社協が災害ボランティアを引き受けるのだと認識されたのはいつ頃からですか。自分達の仕事だと思われているみたいですね。それはそう昔ではなかったと思うんですけど。

山下

社会福祉協議会が災害ボランティアセンターをしなければならないと思ったのは、阪神大震災

のときからですけど、そういう現場がないというか、それまでに災害がなかった。

荒牧

それは皆さんたちの間ではそうだろうかと、うちだよなと思われてたんですね。もう1つ前の災害のときには、なかなかボランティアセンターが立ち上がらなかったと言われてましたよね。だけどやっぱり時間と共に、皆さんの認識がそういうふうに変わってきたということですね。

山下

はい。この前の東北の災害のときも、我々さつま町の社協職員も応援に行っておりますし、阪神淡路大震災のときにも県の社会福祉協議会が募集しまして、行ける市町村社協の職員は行ってくださいということで、行った職員もおります。うちの町からは行きませんでした。

災害ボランティアということではなくて、ボランティアコーディネーターというのを設置する流れが、いつ頃出来たのかちょっと覚えてないですけど、その流れが。

それが福祉におかれて、福祉は福祉協議会ともタイアップしますので。職員を1人設置して、社会福祉協議会に置いておけばいろんなことも手伝いができるので。

当時は町としては災害ボランティアを置くことは義務付けはなかったと思いますが、ボランティアコーディネーターはいます。現在は、肩書き上は3名おりますが、ほとんど地域福祉担当の職員がそれに当たっています

毎年ボランティア養成講座というのを町民の方々に呼びかけているんですけども、必ずボランティア養成講座の講義のコマの中には災害ボランティアの関係を入れるということでしています。

荒牧

ちょっと意外な感じがしました。僕は厳木ダムの方のところに行ったときに、ここの報告書を見せてもらったんです。さつま町のボランティアがどうされたかということが報告書に入っていたんですけども、僕は何となくイメージとしてNPOだけが動いていて、こちらの社協はあまり動いてなかったのかなと思っていたら、結構たくさん数を報告していただいて、その当時でも受け入れていたんだなというのがあって。だからちょっと意外な感じがしたので、今日は改めて出された本人からお聞きしたので確信したというか、分かったんですけど。

何となく、ほかのところではあまり進んでなかったような気がするんですよ。今度北部九州豪雨のときに、意外とすごく動いているというのを発見したみたいな感じで思っていたものだから、相当前にそれが動いていたということは意外でありました。相当進んでいたんだというのが。私たちの認識のほうが遅れていたのかもしれない。

山下

自分達も、見ていてですけども、当時は私はそういった現場にいなかったものですから、10日間の間にこちらでも成長しているんですね。1日目と2日目は、数は入っているけれども何をさせていいかわからない。数だけ集めて、セットでどこにと進めても、受け入れたほうも、「来てくれやったと？何をしてもらおうやろうかい」という雰囲気も最初はあったんです。それで2日目には、どこに行かせるのかということと、何が必要なのかというのを前もって聞いて、それであなたたちはあそこに行って、この仕事をしてくださいというのが分かります。

そういった感じで成長してって、終わるころにはすごくてきぱきとされていた感じがあります。その代わり、朝早くから夜遅くまで、次の段取りをされてたと。

荒牧

参考になりました。ほかにありますか。

それではちょっと時間をいただいて、皆さんの全部には、渡ってないと思いますが、昨年度私たちのNPO法人嘉瀬川交流軸と筑後川流域連携倶楽部の方々と一緒に、北部九州豪雨の際のボランティア活動の調査を行なった報告書を配布してあります。昨年の九州北部豪雨の後に、調査団を2日間に渡って出して、それをまとめて、筑後川フェスティバルのときに私が報告をしました。そしてその後ディスカッションの成果も含めてとりまとめたものです。

一応、ここにパワーポイントを持って来たんですが、口頭でいいです。私たちが知りたかったことは、先ほどさつま町の社会福祉協議会の方にお聞きしたのと同じ質問です。「社会福祉協議会は自分達の仕事だと認識されておられましたか」と尋ねております。それは何でかということ、まだ認識が確立していないのではないかと思ったからです。答えは「イエス」、すべての社会福祉協議会の方が自分達の仕事だと認識しておられました。

そして、どれくらいのスピードの立ち上がりましたかとお聞きしたところ、うきは町、阿蘇市、などの被害が一番激しかったところ、日田市もそうですが、ほとんど前もって市と協定ができて、しかもトレーニングまで積んでいる。うきは市では社会福祉協議会と町と協働で予行演習をやっていた。阿蘇市の場合は、予行演習をやったすぐあとに来たと言っていました。社会福祉協議会としては、「自分達の仕事だと思っていた」というのが1つ目の結論です。

それから次に知りたかったことは、「ボランティアニーズというのはどうやって調べられるんですか」ということです。どこがボランティアに来てほしいと思っているかというニ

それから次に知りたかったことは、「ボランティアニーズというのはどうやって調べられるんですか」ということです。どこがボランティアに来てほしいと思っているかというニ

「九州災害時救援・支援ネットワーク構築に関する基礎調査」

佐賀大学・久留米大学・NPO法人合同調査団の結成

調査団長 荒牧軍治(佐賀大学名誉教授・NPO法人嘉瀬川交流軸理事長)
副団長 駄田井正(久留米大学経済学部教授・筑後川流域連携倶楽部理事長)
団員 鍋田康成(筑後川流域連携倶楽部理事)
古賀秀之(第26回筑後川フェスティバル九州河川交流会議運営事務局長)
山本隆利((社)北部九州河川利用協会専務理事)
事務局 服部二郎(NPO法人嘉瀬川交流軸事務局長)

第1次調査: 9月3日、4日

社会福祉協議会
うきは市、久留米市、八女市、
日田市、阿蘇市
行政
日田市

第2次調査: 9月13日

社会福祉協議会
柳川市

九州災害時救援・支援ネットワーク構築に関する基礎調査 「24.7北部九州水害におけるボランティア活動の実態調査」			
訪問団体	訪問日時	訪問場所	住所
うきは市社会福祉協議会	9月3日午前10時	うきは市総合福祉センター	うきは市西町47-1
久留米市社会福祉協議会	9月3日午前10時	久留米市総合福祉センター	久留米市長門1-1-34
八女市社会福祉協議会	9月3日午後2時	八女市社会福祉センター	八女市本町599
日田市社会福祉協議会	9月3日午後3時	日田市役所	日田市田島2-6-1
日田市防犯協会	9月3日午後2時	日田市役所	日田市田島2-6-1
阿蘇市社会福祉協議会	9月4日午前10時	阿蘇市社会福祉協議会	阿蘇市内後276-2
9月13日			
訪問団体	訪問日時	訪問場所	住所
柳川市社会福祉協議会	9月13日午前10時	うきは市総合福祉センター	柳川市上宮町6番地3
参加者連絡先			
荒牧軍治	090-4774-6611	Aチーム	
服部二郎	090-4274-8501		
山本隆利	090-9488-8961	Bチーム	
駄田井正	090-5285-8912		
鍋田康成	090-3730-6544		

調査結果の報告

●社会福祉協議会が行うことになっているか

発端は 阪神・淡路大震災(1995年)
新潟県中越地震(2004年)
東日本大震災(2011年) ↓ エポック

全国的には

災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(以下:支援P)は企業、NPO、社会福祉協議会、共同募金会等により構成されるネットワーク組織です。2004年の新潟中越地震の後、2005年1月より中央共同募金会に設置

社会福祉協議会が主体
資金は共同募金会

体制が確立

そして、どれくらいのスピードの立ち上がりましたかとお聞きしたところ、うきは町、阿蘇市、などの被害が一番激しかったところ、日田市もそうですが、ほとんど前もって市と協定ができて、しかもトレーニングまで積んでいる。うきは市では社会福祉協議会と町と協働で予行演習をやっていた。阿蘇市の場合は、予行演習をやったすぐあとに来たと言っていました。社会福祉協議会としては、「自分達の仕事だと思っていた」というのが1つ目の結論です。

それから次に知りたかったことは、「ボランティアニーズというのはどうやって調べられるんですか」ということです。どこがボランティアに来てほしいと思っているかというニ

それから次に知りたかったことは、「ボランティアニーズというのはどうやって調べられるんですか」ということです。どこがボランティアに来てほしいと思っているかというニ

●市社会福祉協議会が行うと認識し、準備していたか

●認識し、行政と連携して防災ボランティアセンター

●ボランティアニーズの調査はどのような方法で行ったか

社会福祉協議会が 依頼 地区自治会長 民生委員
報告
●日常的に付き合いがある
●知己の状況を熟知
●優先順位も熟知
優先順位も地区からの報告に従った
マッチングは現場で、参加者の希望

●ボランティア募集はどのような方法で行ったか

社会福祉協議会が ● ホームページ ● Facebook ● ツイッター
非常に有効

日田市では
地元団体からの申し込み 青年会議所 農協 企業 など

参加希望者は非常に多い 対応を認ると非難に変化する

ーズを、社会福祉協議会はどうやって調べるんですかということです。それで意外だったのは、実は社会福祉協議会は自治会とか集落ごとの班長さんと日常的に付き合いがあるそうなんです。その方たちにボランティアニーズの調査を頼みましたと言っていました。そしたらそこから上がってきました。それを皆さんたちに割り振っていく作業をしましたというのがほとんどです。

佐賀では、行政単位と社会福祉協議会はそれほど付き合いがないのではないかなと思ってましたので、意外な感じがしました。阿蘇、うきは、日田、そういうところの特徴なのかもしれません。久留米市はその点の立ち上がりがあまりうまくいかなかったという報告が入ってますので、大都市のほうが速度は鈍いのではないかなという感じがします。

それから中身として、「仕事の内容としてはどういうことをされましたか」とお聞きしました。仕事は明らかに限定されています。それは生活再建です。被災者が生活できるようにすることです。泥で埋まってますので、まず泥だしをして、畳出しをして、すべての瓦礫を出して、最初に生活が可能になる作業に集中します。それが終わった段階で、社会福祉協議会のボランティアセンターは閉じてしまう。そこから外れるのは農業、畜産とかの被害については産業支援としてやるということなので、社会福祉協議会のボランティアの概念からは外れてあります。ただ、阿蘇市だけは、そう

言ってしまうと市自体が減んでしまうので、それも頼みましたと言っていました。だから 30 何日間、ボランティアセンターを開けていたと思います。

次に「どういうふうにボランティアの募集をされましたか」という質問をしました。フェイスブックとかツイッターとか電子的なもの使って募集を出した瞬間に、膨大な数の申込があるそうです。それから、日田市の場合は、青年会議所とか商工会とか、いろんな団体から「行く」という連絡が飛んでくるそうです。だけど受入れ体制がそんなに出来てないので、その処理がなかなか難しかったということです。

言葉でいうと、「災害ボランティアという災害が降ってくるという感じがした」と言う事だそうです。自分達が一番忙しいときに災害ボランティアに入りたいという要請がいっぱい来て、そしてその対応を間違えると怒られるそうです。社会福祉協議会の人が言っていましたけど、ツイッターとかフェイスブックだとレスポンスができますので、それらのツールを使ってお願いしましたということでした。

それから宿泊型というのはありません。先ほど誰かが言われましたけど、自立型でやるということが基本になっていると説明されています。基本的にはそういう枠組みの中で社会福祉協議会が災害ボランティアの受け入れをやっておられます。

ただし、私のイメージですけど、10 人ボランティアを引き受けると 1 人のスタッフがいるそうです。100 人ボランティアが来ると 10 人のスタッフがいる。ところが阿蘇市の場合は 1 日で 600 人来たそうです。そうすると 60 人のスタッフが必要になります。そこで社会福祉協議会では助っ人要請を、ヘルプというメッセージを出しました。そしたら鹿児島県がまとまってグループを組んでやってきたそうです。30 日以上ありましたので、次から次に替わってもらいながら助

●主としてどのような**仕事内容**を依頼されましたか

ほとんどが生活再建(瓦礫・泥などの搬出)に限定

住んでいない家、農作業所、畑地等の泥だしは行っていない
阿蘇市は断らなかった

●スタッフはどのように確保されましたか

○中心は社会福祉協議会の職員 5名～10名程度
(マニュアル作成を担当した人が中心)

○他の社会福祉協議会からの応援
(隣接した社協+県内社協) 阿蘇市は鹿児島県社協からも

阿蘇市の例	600名の参加者
スタッフ	阿蘇市社協 10名 他の社協 50名

● 1つのチームとしては今回の数が限度
● 経験者が会議にまで介入するのは迷惑

ほぼボランティア10名に
1名のスタッフが必要

けて貰ったそうです。最後のほうは、ボランティアに來た人の中で経験がある人について、スタッフをお願いしたと言っておられました。

一番大事なことは、とにかくボランティアニーズを誰かが把握していることが絶対条件ですから、地元の方の参加が一番大事です。地元の社会福祉協議会の人を中心になってやるというのがベースだと感じました。それは揺るがないだろうと思います。だから先ほどのように、我々がNPOがボランティアに入るときには、社会福祉協議会の下にポンと入るというレベルであれば可能だという感じがします。

「自分は東日本大震災で経験しているから」と言って指導者面するやつが出てくる。中には、NPO法人の中にボランティアセンターを自分達で運営したがるやつがいる。そしてそれを実績にして、いろんなところから寄付を貰う事を目論んで、どかっと押しかけてくるボランティアプロみたいなNPO法人がやってくる可能性があるということを言っていました。

今回の場合はそれほど大きなトラブルはなかったみたいですが、中には指導者面するやつ、俺が指導してやると言って入ってくる人がいるんですが、それだけはNPOの方に言っておきますけど、それをするとまったく受け入れてもらえません。

ただし問題はその次です。今回の災害は町の社会福祉協議会がやれるギリギリだったと私は感じます。そう書いたら、うきは市社会福祉協議会のスタッフの方から怒られました。「そんなことを言ってくれたら困ると、それを判断するのは俺たちだと言われました」けど、私の感覚なので許してください。ちょうど今回の規模がギリギリぐらいかなという感じです。阿蘇市の場合は鹿児島県から大量のスタッフを引き受けてやっていますが、それ以上になるとはっきり言うてもう無理です。それ以上の東日本大震災クラスになると、それはまったく別の話です。ですからもし九州で今回以上の被害を受けて、本当にまだ泥だしも出来ないという状況が続いているのであれば、社会福祉協議会だけに捉われずに、別の組織を作らなきゃいけないです。しかし、その時はボランティアニーズをどうやって調べるのかというのが分かりませんので、はっきり言って方策はまったく思いついていません。

それで今回くらいの九州北部豪雨のレベルであれば、これははっきり言って社会福祉協議会

●九州の河川ごとに多くのNPO法人などが活動しています。これらの**団体が組織したボランティアだと受け入れやすい**ですか

- 個人だと受け入れやすいが、団体名だけでは分かりにくい
- 信用のできる組織であるとの情報は、有益である

●防災ボランティア運営の経験者、行政経験者などを組織した**広域防災ボランティアネットワーク**の立ち上げが必要だと思いますか

- 専門的な知識と経験を有する人のサポートは有り難かった
- 過剰介入には迷惑な側面もある

まとめ

●災害ボランティアセンターの立ち上げ運営は、社会福祉協議会の任務であるとの認識は確立しており、市町の単位で準備されているところが多い

●今回程度の災害(レベル1)であれば、社会福祉協議会のネットワークで運営可能である

阿蘇市は今回の規模が限界

●今回災害を超える規模(レベル2)では、独立したセンターを設置し、役割分担で行う必要がある

の下にみんなが付くというスタイルでやる。それを越えたときという判断が難しいのだけれども、越えたときには誰かがもう1つ指揮を執ってやる組織を作る。仕事で分けるのか、地域で分けるのか分かりませんが、そういう形のやつを誰かがやってやる必要があるのではないかと思います。このことをここに書いています。準備として何をやっていけばいいかということのを少し考えます。

一番大事なことで私がつまえたのは、社会福祉協議会は日常的にいろんな人と付き合っています。例えば、自治会長さんとか民生委員さんとかいろんな地域の情報を持っておられる方を味方に付けて、その人たちから瞬時にデータが上がってきます。日常的にやっている作業と、非常事態のときに動かす力、その分析の2つが要るんだと思います。社会福祉協議会さんは福祉分野で日常活動をやっていて、ネットワークを持っている。

では、我々NPO法人は、一体何を日常的にネットワークしているのか。今日の交流会はその1つですけど、僕らは顔つなぎをしようと言って今日集まっているわけです。まず人と知り合うことが大事です。環境とか川学習とか子ども達と付き合うとか学生と付き合いっていくとか、そういうことを日常的にやっておく。異常事態になったときに若い学生が飛んできてくれると地元はすごく元気がつくということなので、それが我々の役割だということを考えておかなきゃいけないから、学生とは常にこやかに付き合っておくとかいうことが必要なのかなという感じがしています。そういう分析をしながらここへ来ていますので、そういうこともちょっとお考えに入れてディスカッションをしてみたいと思います。

実はたくさんゼいたくに、今日お配りした中に設問をつけてあると思います。例えば、「被災時と激特事業終了時の防災意識の変化がありますか」というのは先ほどお聞きしました。それから川内川流域における今後の問題点は何か。ハードの限界点は先ほど防災マップづくりにも励んでいますということで、限界があることは十分承知しています。

4つ目ぐらいまでは多分いろいろ報告を受けていますので、だいたいいいけると思います。それ以降については、NPO法人の中で議論していこうというテーマですので、この設問はだいたい皆さんから報告を受けて終わっているかなという感じがします。私の報告はそれで終わりますけれども、あとはディスカッションに移りたいと思います。

どなたか、これを言っておきたいんだけどとか、こういう質問をしてみたいんだけどということがありましたら、言っても皆さんなかなかされないから、金子先生、助けてください。

金子白川流域リバーネットワーク

かなりまとめていただいているので、皆さん方のお話と荒牧先生のお話でだいたいのところは集約されていると思います。

私らも昨年の7.12で、今言われたように阿蘇・白川流域あたりがやられたんですけど、地元にあるNPOとして何ができると、最初にそれを思ったんですね。川内川のときには上野さんからSOSのメールが来たんですが、たまたまうちは試験期間の真っ最中で出来なかった。大人の

提言

1. 各河川で活動する団体(NPO法人、企業等)のネットワークを構築する

2. ネットワークの事務局を定める

(NPO法人九州流域連携会議、筑後川流域連携倶楽部、九州北部河川利用協会など)

3. 災害レベル1(市町で対応可能)では市町の行政及び社会福祉協議会の支援に徹する

● 情報提供、物資の輸送、ボランティア派遣など

4. 災害レベル2(市町だけでは対応不可能)では、自己完結型の組織を結成し、派遣する

● 避難所の運営、瓦礫、泥の処理、心理ケア

メンバーは何人か行ったんですけど。昨年は、ここではじゃあ何ができるかと考えた時に、地元だけでいけるだろうと。逆に、外部から人が来られても受け入れ態勢が出来ていない。さっき言われた宿泊の問題とか足をどうするのかという問題があったし、阿蘇はああいう状況でとてもじゃないけど交通確保さえ十分じゃなかったんで、来られてもどうにもならなかっただろうと。一応こういう状況ですということをお知らせして、あとはどういう反応をされるか待とうとしました。

あと、……はボランティアに行くのはどうですかという話が来たんですね。うちの団体でいう白川下流の海に近いところ、漁協さんとか環境団体の方々がおられて、今までも学習イベント等で子ども達にお昼の食事の用意をしてもらいました。炊き出しの訓練を兼ねて。それで貝汁なんかを付けて出してもらったんですね、牛井と。それで炊き出しができないかということで、やれることとしてボランティアにいけないのでせめて炊き出しに行けないかと。ただ、窓口の社協さんに行ったら、うちは災害ボランティアを受け入れるだけですと言われてしまって、事務局から阿蘇市のほうに連絡を取って、窓口はどこでしょうかと。そしたら商工課が窓口だということで、そちらのほうに話をして、炊き出しの場所をやりましょうという話で、最終的には100名分の炊き出しをやりに行ったんですけど、1日です。

やる方の日程の都合と受け入れるほうの都合となかなか難しい。その辺の調整をさっと取ってくれるところがあるといいなという感じがいたしました。ただ、やっぱり経験しないと、うちもそれで経験して初めて、そういうところに問題があったんだということが分かった。経験しないとそれぞれの事情が違うので、場所場所によってどうしたらいいかというのを考える必要があるのかなと。ボランティアは5名とかグループでやったほうがいいとか、個人個人で行っても大変だとか、いろんなことが分かりました。だからやっぱり体験しないとなかなか難しいのかなと。学生を連れて行くと皆さんがものすごく喜ばれるということは私たちも経験しました。

ただ、地元のほうでは「ボランティアはうちは結構です」というところもあったんです。というのは、地元の人がだれもいないところに入って悪いことをするとか、あるいはお金を要求するという方もおられたようで、うちはボランティアは結構ですと言われるところもありました。だからこれも経験しないと分からないのかなと。いろんな話は阿蘇のほうでも聞いております。どうしていいのか分からなくて茫然としてて、家にずっとおられた高齢の女性だったんだけど、たまたまボランティアの方が見に行ったら、人がおられるから、どうしたんですかと言ったら、ずっと食べてなくて、もうちょっと遅れたら危なかったんじゃないかとか、そういう方もおられます。良い例、悪い例、いろんな話がありました。

あと、うちのボランティアの中にライオンズの方もおられて、市内の竜田地区なんだけど、そのときにその方を通して災害があった翌日にボランティアは要りますかという話をしたんです。そしたらその方を通して自治会と話をしてくれて、ぜひ必要です、来てくださいと。だから市のほうの対応が出来る前にすぐに、行きますということができたんですね。だから地元との、信号を受取る人、出す人、それがいないとなかなか難しい。おられたのでその辺がうまくいったということです。さっきも言われましたけど、普段から流域での顔の見えるお付き合いをしていないと難しいのかなということです。

古賀大川未来塾

4回の、企業を入れて災害ネットワークの勉強会というか交流会をやったんですけど、昨年度に7.12の災害のときも、麒麟さんの場合は場所の提供を住民にしたということをおっしゃったんですね。それとブリジストンさんは備蓄している水分を住民の方たちに提供したとおっしゃった。だから今後も災害がどんなのが起きてくるか分からないから、企業との連携というのも1つ、ボ

ランティアもありますけど、そういうのも方法があるんじゃないかなというのを感じました。

あと、柳川市は病院とか大きな施設を全部駆け込み寺というか、避難場所に災害マップということで対応した地域もあります。そういうところも今後視野に入れて。

荒牧

ほかに何かアドバイスがありましたら。例えば今、社会福祉協議会さん以外に、その上を束ねてくれる人が誰かいてというアドバイスもありますか。

山下

鹿児島県の場合は鹿児島県の社会福祉協議会、鹿児島県ボランティアセンターが、さっき私が発表しましたように、現地に入って一緒にやっていただいて進めていくということで、スタッフが足りないのは分かっておりますので、役場の方はもちろん、近隣の市町村社協の方もいらして。

今度、11月に災害応援協定というのを結んで、近隣の市町村で災害が起きたときには加勢にすぐにいきましょうというのもする予定にしております。それといろんな担当を決めて、パソコンでボランティアで来た人の把握、生年月日まで入れる担当、広報の担当、資材を運搬する担当とか、細かに担当を決める訓練も必要ではないかなと考えているところですけども。災害がないことが一番ですね。

駄田井筑後川流域連携倶楽部

ちょっと話が違ったほうにいくかもしれませんが、この間、東北での被災地を見てきたんですけど、行ったのは釜石と宮古のほうです。あそこで復旧工事等やっているんですが、正直言うと被災地には気の毒な感じがするんですが、防潮堤の大きいのを作ったり都市計画をやり直しているんですが、そんなことをしても人が帰ってこないんじゃないかと思うんですね、過疎地で。だから釜石なんかでも9万人おった人口が、被災の前から3万人ぐらい減っているわけですよ。そしたら膨大な金を使って、この前来たような津波が起こってもどうにもならないような地域を作ったからって、人は果たして帰ってこないんじゃないかという気がするんです。

だからもしそういう災害復旧をやるときは、人が帰ってくるような地域づくりと一緒にやってやらないと、お金を使ったら無駄だということになりかねないかと。阪神大震災の時とは全然違うんですね。阪神の場合は人が多いですし、仕事があるから、復活したら人も人は戻ってくる。多分、さつま町も必ずそういう悩みはあると思うんだね。せっかくきれいな河川が改修されたんですが、過疎化に歯止めがかかるのかと。

先ほど、改修されたのが財産になると言われてが、その財産をどう生かしていくかということとは一体化してやらないと、せっかくのがダメになる。

そういうことと関係しますと、ボランティアに来てくれた人というのはあとの活性化につなげることが出来ないだろうか。例えば町でイベントをやるときには、ボランティアに来ていた人は案内を出してするとか。ボランティアで社会福祉協議会を通じないでボランティアをやろうとしたら独特の組織がやるというのは、普段から地域づくりをやっている人たちとの連携みたいなのがあって、いざとなったときに助けて貰える。そういうことでボランティアに来ていた人を地域づくりを利用するとか、そういうトータルな組織みたいなのが要るんじゃないかならうかと。

だから役場の組織の中でも、社協は社会福祉しかやっていない、商工会は商業のことしか考えてないとか言うのはでなくて、そのことを融合させたような何かをやらないとダメな気がするんですけどね。そういうのをNPOというのが縦割りじゃないから、いろいろつながるものですから、そういうネットワークづくりが出来るといいんじゃないか。

荒牧

阿蘇市はボランティアに来た人たちが万の単位でしたっけ、全部登録されているわけですよ。先ほど言った生年月日と名前が全部分かっているわけですね。怪我しないようにするために。住所も分かっているから、そこに感謝状を市長が贈って、同時に阿蘇市応援する団みたいなものに仕込んでやろうと思っていて、いろんなことをやっていると聞きましたね。だからあそこに来てくれた人たちに対しては、ただ単に感謝状を贈るだけじゃなくて、次も応援してねというリピーターにしてしまえという作戦を役場がやるという話をしていましたね。

そういう考え方というのは、駄田井先生が言われたみたいなことは、もうちょっとそういう知恵を学んでやっていくといいのかもしれないという感じがしますね。

それから先ほど落としたんだけど、一番下に質問が書いてあるんだけど、実は資金のことが結構大事だということを指摘されたんですよ。それはさつま町の社会福祉協議会の方も説明されていましたが、実は社会福祉協議会がボランティアセンターを立ち上げるときに資金のことは一切考えないそうです。電話機を借りるとか、携帯電話を借りてくるとか机を借りてくる、ファックスを借りてくるとか、予算の折衝を一切せずに、レンタル屋さんに電話してパッと持ち込んできて、翌日には使えるようにするそうです。オフィスも、ここと決めていて、すぐ立ち上げる。お金がかかっても。

それは後ろに赤い羽根が付いているからです、すなわち共同募金会の資金が裏打ちされていて、必要なものは後払いでくれるということになっているからです。うきは市の場合 300 万と言われた気がするけど、そんなオーダーです。300 万程度の金がいつでも用意されているからという感じなんですね。だから日常的には社会福祉協議会の仕事があって、ボランティアのときにも資金の裏打ちがある。予算のこととか市にいちいち相談していると絶対に動きださないそうです。その資金が後ろにあることが非常に有効だという話があるわけですね。

ですから社会福祉協議会以外の災害ボランティア受け入れシステムを作るときにも、それは国土交通省がやるのか、どこがやるのか分かりませんが、「予算の心配はするな、行け」という何かの裏打ちが必要です。それがないととてもできないですよ。予算をどうやって組むのか、どこから持ってくるのかとか考えたら、立ち上がれないじゃないですか。その仕組みの良さみたいなものは、やっぱり赤い羽根かという感じがしました。

その裏打ちは私たちにはない。NPO 法人が動き出すときにもどこか資金源が必要です。もう一つのボランティアセンターみたいな、そういうのを国交省が後押ししてくれるとか、そういう思想がないと活動する団体は逡巡するんじゃないかなという感じがしました。だから社会福祉協議会のシステムはうまくできているなという感じがしました。

金子

関連して、いいですか。

さっき炊き出しの話をしましたが、これはお金がかかるんですよ。最初に心配したのは、まず行ってくれること。だけど食材は何とか費用を用意しなきゃいけないのかなと。ところが裏付けがない。NPO は残念ながらお金を持たなくて、しょうがないからまず寄付を募りました。リバーネットワークの中で含めて寄付してくださいとやったんだけど、結局、3 万何がしぐらいなんですよ、集まったのは。白川の日も含めて、こういうのをやりますのでというのでやったんですね。

炊き出し 100 人分でやるのに、だいたい 4 万ぐらいかかるので、まあまあ寄付でやる事ができた。やっぱりお金がないと、1 万でも 2 万でもお金がないとなかなかできない。言われたとおり、まさに裏付けみたいな。あるところは動けるけど、NPO はそれがないので、何かないのかなと。

荒牧

災害が起こった時に我々が寄付をすると、1 回共同募金会に行くんですよ。その後、後払いでもいいから活動に資金が回ってくる制度があると良いんですがね。例えば金子先生のところの白川流域ネットワークがボランティア団体として信用できる団体である事を災害認定 NPO かどこかが認定してくれて、その認定団体には共同募金会が何かしてくれるとかいうのでもいいんですよ。

今は災害が起こると相当大きなお金が動きますね。皆さんたちがボランティアと一緒に災害のときには寄付をする。そのお金の配り方の問題、被災者に行くだけじゃなくて、社協にももちろん行くし、ボランティアセンターにもいく。加えて認定の金子先生のところにも回っていくような仕掛けがあると良いなと思います。今は皆さん心が優しくなったから寄付が結構集まるんです、そういう寄付の制度をうまく利用すると、後払いでお金が来るかもしれません。金子先生、4 万円ぐらいだったら何とかかなる、という感じがしましたけど。

中野

先ほどから聞いていると、都会の災害と田舎の災害は全然違うなと。私のところは、昔、本城村という菱刈町の中に本城村とあったんですけど、そこの中の災害だったんですよ。ところがその中の災害というのは、川内川から水がいり込んできて、流れない災害なんですね。たまり水の災害。

ところがそれでも私が歩いて道路から首ぐらいまで浸かってるんですけど、それでおばちゃんたちを担ぎ上げて外に出してというんですけど、本城村の場合は炊き出しから、はっきり言いまして道路が菱刈町の役場とつながっているのが 2 本あるんです。1 本が水没、1 本は道路が破壊です。それで町長も来れない、誰も来れないという状態になって、当時たまたま私が消防の分団長をしてるじゃないですか。そしたら僕に電話が来て、全部仕切れと。校区公民館組織というのがありまして、これはものすごく機能しているんです。だけど仕切る人がいないんですね。災害の時に仕切る人がいない。

だから私のところに電話が来て、バーッと命令でずっと動かしたら、1 人のけが人も出なかった。さっき自助公助とかいろんなのが出てますよね。その中に「近助」という、近所が一番ですよ。ものすごく早い。校区コミュニティと今頃はなくなってますよね。昔は、菱刈町の場合は本城校区公民館だった。この中に女性部があり、炊き出しはそっちで全部して、それとお風呂なんかもそっちの公民館の命令で汚れた人は全部、女性は特に入ってくださいというのが流れたんですね。

だから都会と私らみたいな田舎では取り上げ方も全然違うし、お金も全然要らなかったんですよ。米はみんな持ってるし、農業があるから。何でもあるんですよ。だからお金の問題とか出てくるけど、……ですね。

ただ、5 人は私の家に災害ボランティアを受けたんです。ところがその 5 人の人が、2 晩くらい泊まったんですが、夕方ご飯を食べるよと言ったら、外で 1 人泣きよるんです。すぐに行って、「どうしたんだ、何か苦しいのか」と言ったら、感激して泣いている。大学生が、災害ボランティアで僕が入れたところの人たちがものすごい感謝したと言って、これだけ感謝されたことがなかったと言って泣いているんですね。すごいことだったと。

それと 2 日目に行ったところが酒屋さんだったんですけど、そのところできつい仕事をさせられたのかしらんけど、酒屋さんが 1 人ずつに、5 人いましたから 1 万円ずつくれてるんです。僕は全然知らなかったんですけど、帰ってきて夕食を食べるときに、1 人 1 人僕に 1 万円持ってくるんです、返しててくださいって言って。受け取らないと言ったけど渡したと。どうしようもないから預かったけど、返しとってくださいと。また返してくれたのが僕が嬉しかった。それを

また持って行ったんですけど。

やはりボランティアで、私みたいな 60 過ぎましたけど、年寄りが行くんじゃないくて若い人が行くというのは、お互いに伸びていくような気がしますね。

荒牧

なるほど。意味が少し違うわけですね。単なる労働だけじゃなくて。

中野

都会の災害の現場に入るのと田舎に入るのでは、またこれも雲泥の差がある。田舎は田舎になればなるほど、すごい心を出してくれるおばちゃんたちがいますので。

もう 1 つは、片付けの段階のときに、菱刈というところはちょっとおかしいなと思ったのは、中学生がものすごくボランティアで集まったんです。中学生だらけなんです。それで菱刈があまりボランティアを受け入れなくて済んだというのがありますね。

それで一番ためにならんかったのが、議員だったなと。議員が一番ためにならん。ただ、視察に来るとするのは国会議員とか県議会議員というのは、国や県からお金をどうして持ってこようかというのがあるけど、議員の人でたかが町議会議員で視察に来ているんですよ。どっかから金持ってくるんだと言いましたけどね。こっちはスコープを持ってはねているのに、だからそういう考え方というのがおかしい人もいますね。

荒牧

先ほど金子先生の話にしろ、今の話を聞いていると、先ほどちょっと出たけど中学生や高校生が働いてくれたのを見て、地元の人が涙を流して喜んでいたというのは、やっぱりそのことはボランティアとは違うイメージがありますね。ただ単に泥だしするだけじゃないもの、世代をつなぐようなことがあると。

言っておきますけど、今の若者たちはめちゃくちゃ優しいですよ、はっきり言って。いわゆるあまり勉強しなかった時代、ゆとり世代の連中というのは、勉強はしないけどすごく優しい人物が育っています。それは本当に痛切に感じます。だからゆとり世代がまた変わってつっこみ世代になるから、この優しさも消えてなくなるのかという感じがするくらい、今の子たちはボランティアに行きたがるし、寄付はしたがるし、何とかしたがるという気はありますね。

ですから災害が起こった時は必ずボランティアがボンと降ってくると思っておかないと、対応を間違えるとあとで怒られるという感じがするということを言われました。だからそういうこともちょっと頭の中に。

どうぞ。

岡緑川流域会議

すみません。岡でございます。時間がないので、交通費をもらった分だけしゃべりたいと思います。

先ほど中野さんが言われたんですけど、これは東京消防庁が使い出したんですね「近助」という言葉は。隣保組さんの、5〜6 軒の。これは一番大事だと僕も思っています。

今、熊本市は 900 ぐらいの自治会があるんです、熊本市内に。その町内会単位でハザードマップ作りを進めています。その中で議論しているのは「近助」です。これが大事だと思っています。

最近、いろんな NPO さんとかお話をすることがあるんですけど、NPO が専門化しつつあるんです、最近。NPO の縦割りが出来てくる。これはまずいなと思ひまして、先ほど駄田井先生が言われたことはとても大事で、こういうネットワークを作っていく中でネットワークを作ろうと思っている団体、NPO さんが、地域の社会福祉協議会や地域の自治会や街づくり団体とつながっておくということが、災害ボランティアをしようと思った時にとても大事になるのではない

かと。特に僕は最近ハザードマップづくりにかかわっていますので、それを思うんです。

地域の団体は、逆に発信力というか、それを高めていく必要があるし、私たちみたいなテーマコミュニティのNPOというのは、逆に地域とどうつながっているかと。それと先ほど金子先生が言われたんですけど、自分たちに何ができるか、自分たちにできることは何だろうかというのを常に学んでおくとか、鍛えておく。それが多分、事前の話なんですね。災害が起きる事前の話なんです。

発生直後というのは、そののところでは先ほど言った「近助」というのは非常に大切になってくるし、事後の話になってくると、先ほどから社協さんたちがやっているボランティアセンターの話であったり、避難所運営の話が出てきます。今日、木下さんが来られてないんですけど、電話が直前にあって話しておいていただきたいと言われたことがあって、それは災害弱者に対する対応です。特に障害者、身体障害は分かるんですけど、一番今トライアージしていくのに問題になっているのが精神障害。これは見た目分からないんですよ。それも軽度から重度までありますから、そういう災害弱者の中でも気を使う、トライアージという言葉を使いましたが、その辺の取り扱いというのを事前の中で、そういうことにボランティアに行こうと思うNPOや手伝おうというNPOは学んでおく必要があるんじゃないでしょうかということをおっしゃってください。これは共通で話していると思いますから、そういうことをちょっと考えていただければなと思っています。

光武嘉瀬川交流軸

嘉瀬川交流軸の光武と申します。荒牧先生と一緒に活動させていただいているんですが、お手元に『自分の命を自分で守るために』という冊子を配りました。これは国交省でやっている水防演習というパンフレットですが、『自分の命を自分で守るために』という一番下に公益法人日本河川協会というのが書いてございますけど、これは歴史は古くて昭和 15 年ぐらいから防災に関してどうあるべきかということ年全国的に議論していて、各県にも河川協会がございます。それを全国でまとめたような組織でございます。そういう中で、最初は防災から始まっているんですが、現在は防災と河川の愛護、そういうのを主体にしている活動でして、月 1 回『河川』という雑誌を出している団体でございます。

そこで日本河川協会が国交省でやっていただいている水防演習、これは九州でも各県回りで年に 2 回大々的にやっていただいているんですが、そこに参加して、この冊子を配らせていただいています。

先ほどからいろいろお話があつておりますように、自助公助というのが出てきておりますけど、公の立場では建設省とか県とか市とかいろいろやっていただいておりますけど、近助とか共助とかいう話もありましたけど、いろんな活動をしていただいて、そういう成果で皆さんの命が守られてきているんじゃないかと思います。この頃、震災を受けてからですけど、自分の命を自分で守るためにというのがかなり大々的に徹底していこうということで、取り組みがされております。

先日も福岡で防災のシンポジウムをやりましたけれども、最後に九大の先生が「自分の命は自分で守らないといけないんだ」ということで、先ほどのビデオで竹下さん、事務所の課長さんが「川内川がきれいになりました。整備も終わりましたが、いつ何が起こるか分かりませんので、自分の命は自分で守ってください」というお話がビデオで出ておりましたね。それを具体的にどういうのをされているのか、していけばいいのかなというのが冊子の中に書いてございます。下に、河田恵昭先生というのがありますが、これは京都大学の防災研の先生でございます。つい先日も、東南海日向沖地震のまとめということで、テレビにも出ておられました。その先生が最終的には自分の命を自分で守るためにということで、先生にご協力をいただいてまとめた冊子がこ

れでございます。

中身は後ほど見ていただきたいと思いますけど、表紙に書いてございますとおり、先ほどお話がございましたとおり、災害というのはいろんな災害がありまして、場所によっても違いますし、時間もありますし、休みの日と普通の日でも違います。そういう中で、自分の命は自分で守らないといけないなということで、事例をあげて書いてございます。

例えば見ていただきますと、2 階のほうが安全だという言葉がだいぶ出てまいります。地震でも水害でも 2 階のほうが安全。これは簡単なことでございますので、こういうことを地域の皆様方とお話をされるときに一緒に話していただければなということでお配りさせていただきました。

実は昨年、宮崎で水防演習があったんですけど、これをお配りしてましたら、ある市町村の水防担当の方がお見えになって、この冊子を 200 部くださいとおっしゃるんです。用意しますと言ったら、皆さんにお配りして、実際にこういうことを知っていただくということで配らせていただきたいと思いますということでお話がありまして、お届けしたところでございます。

もう 1 つ、今日お話を伺いして、これだけの災害があったのに被害は少なかったと云えると思います。お一人は亡くなられてましたけど。私も九州地区の水防をしていますので、24 日に水害があってから現地をずっと回らせていただきました。虎居も見せていただきました。2 階のこれぐらいまで来ているところを上にながらって、地域の方と一緒にお話をさせていただいたんですけど、それでもお亡くなりになってないのはすごいことだと思いました。これは地域の方が日ごろからそういう話をされているのではないかなと思っています。

もう 1 つは、日本河川協会としても、そういう事例もこういう冊子にして全国に発信したいと意向もございますので、何か良い事例がございましたら、こういうことで助かった、こういうことをしたら残念ながらこうだったというお話がございましたら、ご連絡いただければ、参りましてお話を伺いたいと思いますので、よろしく願いしたいと思います。

荒牧

どうもありがとうございます。

それでは時間が終わりにになりましたので、山本さんのほうから一言、全体の締めをお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

山本北部河川利用協会

今日は貴重な時間を、また大変有意義なご意見を伺いました。私のところで荒牧先生にお願いしまして、災害の整理、ネットワークの構築、災害時の緊急時における市民団体の役割や活動等を取りまとめてくださいということで、一緒に作業をさせてもらっています。

一応 3 年ぐらいでまとめませんかということで、荒牧先生と打ち合わせをさせてもらって、最初に話がありましたように、昨年は筑後川流域の災害の被災したすぐのこと、それから今年はこのように災害後 5 年が経って復旧がひと段落したところの状況ということで、まとめをさせていただきます。

私は個人的に思っておりますのは、今日の話は災害を被災したすぐの状況のときに、若い人たちがボランティア活動にいかに関わるかということが中心で話があったように思いますが、時系列にいきますと災害があったすぐの生活を立て直すための支援、それからその先、ちょっと小牧さんからお話がありましたが、その後のフォローというか、被災された方、最近では高齢の方が多くて、その方たちが立ち直るのにすごく時間がかかっているんですね。メンタル面もそうですし、ちょっとしたこと、それから病気が再発したとか、そういうことも入れて、ボランティアとしてはそういうところも社協の組織が解散したあとにボランティアとしてどういう取り組みができるのか、そういうところまでまとめができたらいいいのかなと思ったりしています。

また、あとは先生に期待して、来年取りまとめができたときに皆さんとこうして集まって公開ができればいいんじゃないかなと思っております。私のほうからは以上です。

荒牧

どうもありがとうございました。3 時間使わせていただきました。貴重なご意見を全部録音させてもらっています。使うか使わないか、皆さんにちゃんと聞いてから報告書に書きますので、それはお許してください。貴重なご意見を削れと言われても困りますので、お願いいたします。

それから今日はNPO法人の方にたくさん集まっていただきましたけど、時間があまりなくて発言されてない方もおられます。10 月に南小国で、皆さん方の意見を聞こうと思っています。バスで来る最中に筑後フェスティバルのときに集まってくださいと頼もうと、ウィークデイですけど勤めている人は年休をとってください。いろいろ予定があるかもしれないけど、その時は集まってください。せっかく南小国が引き受けてくれていますので、その日にやりたいと思います。

また、NPO 法人の方にはもう 1 回集まってもらいますので、そのときにたつぷりと時間をとって意見をお聞きしますので、今日はお許してください。あとは交流会の中、食事会の中、2 次会の中でいっぱいお話をしていただければいいかと思います。そういう形で進めさせてもらって、もう 1 位回集まっていただきますので、今日はこういう形で終わらせてください。どうもありがとうございました。

さつま町の方々、関係者の方々には本当にいろんなことを教えていただきました。これを自分たちの糧にして、報告書の中で生かしていきたいと思います。本当に感謝いたします。どうもありがとうございました。

交流会



駄田井先生交流会開会の挨拶

6月2日(2日目)

8:00 北薩広域公園出発

9:00 鶴田ダム見学

11:00 大口市へ移動

曾木の滝分水路、旧曾木発電所遺構 曾木の滝 小水力発電



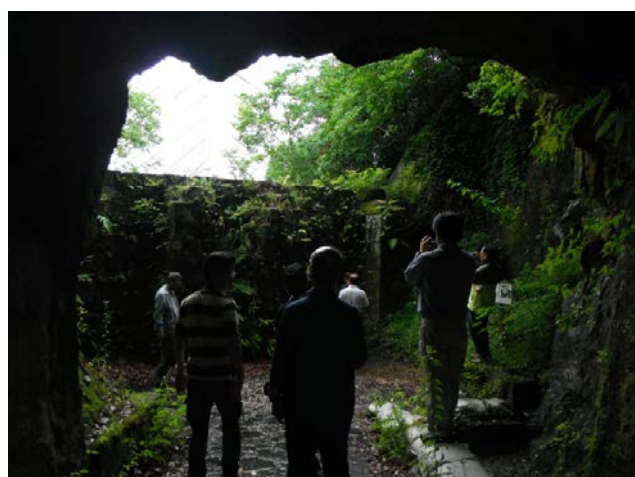
鶴田ダムの見学



井木場氏(バイオマスパークあったらし会)



旧曾木発電所遺構



旧曾木発電所遺構送水トンネル



曾木の滝分水路



曾木の滝分水路